

932
SH12

932-Sh12-4ウ



1200500759836



始



WILLIAM SHAKESPEARE
T W E L F T H N I G H T

Translated by
SŌFŪ TAKETOMO

ŌSAKA BUNKO

1948



From a Painting by Daniel Maclise, R.A.
Malvolio and the Countess.
Twelfth Night, Act iii, Sc. 5.

932

Sh12-4

(2)



株式會社
大阪文庫





解題

一 原典

『十二夜』 *Twelfth Night* には「四枚折本」といふものがない。すなはち、シェイクスピアの在生中に出版せられた版本マスタが存在しない。今日私どもの有つてゐる本文の原典となるものは一六二三年に刊行せられた「二枚折本」の全集の中に收められたものが唯一つあるに過ぎないのである。一六二三年十一月八日、出版組合登記簿 (*Register of the Stationer's Company, Aber's Transcript, vol. iv, p. 107.*) に記載せられた「二枚折本」の出版登記の中に「マスタア・ウィリアム・シェイクスピアの喜劇、史劇、悲劇」“*Master William Shakespears Comedyes, Histories, and Tragedies*”

とあり、更に『當臺本の中の幾多のものは、これまでに他の人人のために登録せられしことのなきものなり。』“see manie of the said Copies as are not formerly entred to other men.”とある。「十二夜」がその『幾多のもの』の中の一つであつたことは確實である。「二枚折本」の本文に缺點がある場合には良好な「四枚折本」の存在することが望ましく、さういふものの存在する時には双方を照らし合はせて正しい本文に近いものを有つことにもなるのであるが、「十二夜」に於いてはそれが許されない。唯、幸にしてこの戯曲の本文はシェイクスピアの臺本の中でも珍らしく純良なものであり、文脈が亂れたり、意味が通じないといふやうな個所は殆んど一つも發見せられない。従つて、本文批評の方面に於ける異説や論争などはあまり起らなかつたやうである。

二二一年代

著作年代に就いても比較的確實に近いものを推定することが出来る。フランス・ミ

ヤアズの『藝苑至寶』*Palladis Tamia*の中に列擧せられたシェイクスピアの著作目録の中には入つてゐないから、一五九八年以後のものであることは略疑を容れない。大英博物館所藏ハーレイ文庫の寫本の中に一卷の日記があり、一八三一年、ジョン・ペイン・コリヤア (John Payne Collier) に依つて出版せられ、ジョウゼフ・ハンタマ (Joseph Hunter) に依つてミドル・テムブルの狀師ジョン・マニングガム (John Manningham) の日記であると認定せられた。空際はあるけれども、一六〇一年のクリスマスから一六〇三年四月十四日まで續いてゐる。その一六〇一年二月二日のところにマニングガムは次のやうな事實を記入してゐる。

“Feb. 2.—At our feast wee had a play called Twelue night or what you will. much like the commedy of errores or Menecmi in Plautus, but most like and neere to that in Italian called Inganni a good practise in it to make the steward beleue his Lady widdowe was in Loue with him by counterfaying a lettre, as from his Lady, in generall termes, telling him what she liked best

in him, and prescribing his gesture in smiling his apparrail etc. And then when he came to practise making him beleue they took him to be mad.” 4

『二月二日——われらの饗宴に於いて、十二夜、或はお好きなやうに、と稱ふる演劇ありしが、これはまちがひの狂言或はプロークタスに於けるメヨークマス兄弟によほど似たれど、イタリヤ語にてインガンニ「だぶらかし」と稱ふるものには最も似通ひて且つ近きものなり。その中のおもしろき演技は家令にその主人の未亡人が彼に心を寄することを、彼女が彼の如何なるところを最も好めるか、といふことを告げ、又その笑ふ時の身振、その衣装などをあらかじめ指定せる、その夫人よりの漠然たる言葉にて書きし手紙を贋造することに依つて信ぜしめ、さて、いよいよ彼が實行するに及んで、人人が彼を狂人なりと思へることを信ぜしむるものなり。』

とある。これに依ると、一六〇一年二月二日の夜、法學士協會の宴席で「十二夜」が上演せられたことは確實である。それ以前に上演せられたことがあるか、又それ以前の何時頃書かれたか、といふことを確定することは出来ないけれども、この日記の一節か

ら受ける印象はこれが始めての上演であり、その直前、一六〇一—二年の十二日節即ちクリスマスの日より數へて十二日目に當る一月六日の神顯祭（モレゾクネイ）の夜上演せられるといふので筆をとつたものが、何かの都合で二月二日まで繰延べられ、二月二日の聖燭節（キヤンドルマス）（聖母マリアの清めの祝日）の夜の饗宴に上演せられたのであらう。劇團の公演のためであつたか、私人の餘興のためであつたか、さういふことは分らない。臺詞（セリカ）の中に法律上の術語が多いところなどを考へると、観客が法學士の仲間であることを意識して書いたものであるやうに思はれる。時事問題に觸れたところではマルヴォリオの醜弄に關聯して後に言及するジョン・ダレルの事件や、サア、トマス・ポステュマス・ハウビーの裁判沙汰がいづれも一六〇一年に近い頃に起つたことであり、一六〇〇年一月にはイタリヤの公爵ヴァレンティノ・オルシーノがイギリスの宮廷を訪問したことがあつたので、そこからこの劇の曲中人物、公爵オーシーノウとヴァレンタインの名が出たといふことも考へられ、一五九九年の終、或は一六〇〇年の始にベルシアを訪れたサア、アントニー・シャーレー兄弟の旅行記、「サア、アントニー・シャーレー旅行實記」A true Report

of Sir A. Shirleys journey が一六〇〇年に出版せられて、發賣を停止せられ、一六〇一年九月には「新訂増補・サア、アントニー・シャーレー旅行譚」 A new and large discourse of the travels of Sir A. Shirly が出版せられたといふことが第二幕第五場と第三幕第四場に再度出て来るペルシアのソーフィに對する言及の理由であると推定せられ、第三幕第二場のマライアの臺詞の中に出る「インド増大の新地圖」が一五九九年に出版せられたエメリー・モリノーの地圖のことを言つたものであることなど、この劇が上演せられた頃の社會を賑はしたさまざまの事件や問題がかなり濃厚に反映せられてゐる。

これらは先づ動かない學説となつてゐるものであるが、今日私どもの有つてゐる唯一の原典、即ち「二枚折本」の本文が^{フオレスト}一六〇一年に上演せられたこの戯曲のそれであるかといふことになる、そこにはなほ二三考察すべき點が残されてゐる。「新・ケイムブリッジ・シェイクスピア」の校訂者ドウヴァ・ウィルソン (Dover Wilson) やシェイクスピアの劇に用ゐられた歌謡と音樂の研究者リッチモンド・ノウブル (Richmond

Noble) などの考へるところに依ると、曲中人物の中、道化のフェストを取扱つた部分には、ヴァイオラにさしかへて、歌を歌ふことの出来るフェストを特にそこへはめ込んだやうな痕迹が見える。第一幕第二場にヴァイオラが船長に言ふ臺詞^{セリヤ}を見ても分るやうに、ヴァイオラは元來歌を歌ふことが得意であり、それに依つてオーシーノウに奉公することになつたのである。ところが、第二幕第四場になり、公爵がシザリオ即ちヴァイオラを呼び出して歌を歌はせやうとすると、その邊にゐない、といふので、^{キュー}シザリオがフェストを連れて来る。フェストはオリヴィアの家の者であるから、それがオーシーノウの館^{サカタ}にうろついてゐるといふことからして少少辻褄があはないのであるが、それはフェストの辯明にもあるやうに、氣まぐれな男のやりさうなことにしても、ヴァイオラのお株をとつて了ふのは、この劇全體の構成上、ちよつと合點が行かぬ。ノウブルが推察したところに依ると、これはシェイクスピアの屬してゐた「侍從^{ロイド・サエイム・パレンス}附劇團」に、リユートを奏でたり、歌を歌つたりすることの出来る童優があつて、本來その童優に音樂の才能を發揮させるのが目的でヴァイオラの役を振當ててあつたのだが、それがゐなく

なり、ヴァイオラに歌を歌はせることが出来なくなつたところへ、今度は歌の上手な道化役が出て来たので、かういふ場面が必要になつたのであるといふ。「十二夜」が上演せられた一六〇一年から三四年間はシェイクスピアの悲劇時代であるが、「ハムレット」にも「オセロ」にも歌の上手な童優（即ち女役）を必要とする場面がある。オフィーリアもデズデモーナもヴァイオラも、そのおなじ童優に振當てたものだと思へられないことはない。その童優の代りがなかつたところへ出て来た道化役と言へば、さしづめ一五九九年にウイリアム・ケムプが「侍従卿附劇團」を去つた後、その後に迎へられて地球座の舞臺に活躍したロバート・アーミンであらう。「リア王」の道化はアーミンの爲にシェイクスピアの作つた人物であり、これも亦歌を歌ふ道化である。「十二夜」の最後の歌謡と「リア王」の中の歌の一つとは酷似してゐるが、ドウヴァ・ウィルソンは「リア王」よりも後に書かれたものであり、「十二夜」の最後の歌は多分アーミンが作つたものであらうと考へてゐる。無論一六〇一年に上演せられた時にもアーミンは道化として活躍してゐたのであるが、歌の方はヴァイオラに扮する童優に譲つてゐた。その童

優が得られなくなつたので、多少劇の筋を改め、今度はフェストに扮するアーミンに歌を歌ふ機会を與へることになつたのである。改作の年代は「リア王」上演の後、略一六〇六年であつたといふ。一六〇六年五月二十七日の發令で劇の臺本に神の名を濫用することを禁じたのが原典の本文テキストに於けるジョウヴ（Jove）の瀬出といふ結果になつた。「清教徒」マルヴォリオがジョウヴに感謝を捧げるところや、サア、トウビーがサア、トーパスになつたフェストとの出あひがしらに、「God bless you」と言はないで、「Jove bless you」と言ふところなどは、今日でこそ何の氣なく讀んで了ふのであるが、この發令が出た頃の観客にはおもしろい諧謔であつたに相違ない。それから又、一六〇六年五月三日にはジェジュイット教徒ヘンリ・ガーネット（Henry Garnett）が「火藥陰謀」‘Gunpowder Plot’に參與したといふ嫌疑の下に處刑せられた。ジェジュイット教團はイギリス國內に潜伏して専らカトリック教の宣教に努めてゐたのであるが、當時國禁の宗教であつたから、密間に附せられた時には巧妙に難關を潜り抜ける爲の論法や策略を用意してゐた。この頃、カトリック教徒の間にひそかに流布せられたれ「一語多

義論』 *Treatise of Equivocation* などがその典型的なもので、審問の際、口頭では一つの意味について答へ、心中ではその反対の意味について答へても、良心上の問題にはならないといふのである。第三幕第一場、ヴァイオラとフェストが問答をするところには明らかにこの『一語多義』の論が反映せられてゐる。

Clown. Why, sir, her name's a word; and to dally with that word make my sister wanton. But indeed words are very rascals since bonds disgraced them.

Viola. Thy reason, man?

Clown. Troth, sir, I can yield you none without words; and words are grown so false, I am loath to prove reason with them.

Viola. I warrant thou art a merry fellow, and carest for nothing.

Clown. Not so, sir, I do care for something; but in my conscience, sir, I do not care for you: if that be to care for nothing, sir, I would it would make

you invisible.

道化 だつてさ、名は言葉でせう。その言葉をなぶりものにするると、妹がえたいの知れないものになります。だが、禁令でとつちめられてからつてものは、大體言葉つてやつが全く仕方のない者になりましたよ。

ヴァイオラ これさ、その譯は？

道化 譯を言へたつて、あなた、言葉がなけりや言へませんよ。ところが言葉つてやつがとても嘘吐きになつたので、私やそんなもので譯を言ふのがいやなんです。

ヴァイオラ お前さんはきつと吞氣坊主で、何物にも構はない方だらう。

道化 さうちやありません、或物には構ひますよ。だが、本心ではあなたに構ひませんね。それが何物にも構はないことだと仰有るなら、それで以てあなたが雲隠れになればいいと思ひます。

最後の言葉は「するとあなたは何物でもなくなるわけですから」といふことになる。

ガーネットの處刑に依り、その頃の人心を聳動させてゐた時事問題、殊にその『一語多

義』の論に言及したものとすれば、この一節も亦一六〇六年五月以後の改作の際に挿入せられたものと考へなければならぬ。

附記。

Equivocation の影響は『ハムレット』や『マクベス』の中にも明證があり、ここに引用した一節の中の「雲隠れ」はジェシュイット教徒を見たか見ないか、といふ審問に際して equivocation を用ゐる場合の一例になつてゐるのであるが、ここにはそれらの委曲に互らないことにする。

これを要するに、『二枚折本』に収載せられた原典の本文は一六〇一年に書かれ、一六〇六年にシェイクスピアが自ら大いに手を加へたものだといふことになる。一六〇一年には純粹喜劇の絶巔に達してゐたが、悲劇の方面ではまだ本格的なものを試みてゐなかつた。一六〇六年のシェイクスピアは四大悲劇や問題劇を完成して詳にその方面の體驗を重ねた後のシェイクスピアである。『十二夜』の初稿が一夜の歡興のために作つたもので、その形式も亦『まちがひの狂言』より長いものではなかつた、といふことがノ

ウブルの言ふやうに確定的ではないまでも、改作せられたものが殆んど洗練の極致に達したものであり、すむぶん思ひ切つた喜劇的要素と共に一味の哀感を伴ふものであることは、これらの事情に負ふ所が多かつたと思はれる。ドウヴァ・ウイルスンに依れば、この改作の必要が感ぜられたのは、一六〇六年、デンマルク王クリスチアン四世のイギリス訪問に際して當時シェイクスピアの屬してゐた「王室劇團」が、七月十七日と八月十一日に二回の上演を命ぜられたので、それに間に合はせるために舊作を書き改めたものであるといふ。すると、改作の年代は一六〇六年五月から七月までの間といふことになる。

三 題 材

マニングムの日記はこの戯曲の本筋について二つの題材を暗示してゐる。いづれも双生児の相似より生じる人違ひの喜劇をとりあつたものであるが、その第一は、シニ

題 材

イクスピアの初期の喜劇『まちがひの狂言』 *The Comedy of Errors* に於いて既にその影響を辿ることの出来るプラウトゥス (Plautus) の『メナエクス兄弟』 *Menachmi* であり、第二は『たぶらかし』 *Gl' Inganni* と稱するイタリアの戯曲である。第一については殊更に論じるまでもない。シェイクスピアが一度用いた意匠を幾度も流用することは、その他にも實例の少いことではなく、その間に彼の戯曲が發達を遂げたものであることは明白である。第二の題材について『ニウ・ヴェリオーラム・シェイクスピア』を校訂したファーネス (Horace Howard Furness) と『アーデン・シェイクスピア』の *Twelfth Night* を校訂したモートン・ルース (Morton Luce) の研究に依ると、*Gl' Inganni* と題するイタリアの戯曲は二つある。その一つはニコロ・セッキ (或はセッコ) (Nicolo Secchi, or Secco) の作つたもので、一五四七年ミラノで上演せられ、一五六二年フィレンツェより刊行せられた。双生兒兄妹の相似を取扱つたものではあるが、『十二夜』に似たところはあまり著しくない。今一つはクルチオ・ゴンザーガ (Curzio Gonzaga) の作つたもので、一五九二年ヴェネチアより出版

せられた。これも亦双生兒兄妹の相似をとりあつたものであるが、戯曲それ自身はシェイクスピアの題材としての確證を與へるほどのものではない。唯、男装して兄にとり違へられる妹がチェザーレと名乗つてゐるのはシザリオの名を暗示したものであらうと考へられてゐる。『*Gl' Inganni*』と題する戯曲がまだ一つある。ドメニコ・コルナッチーニの作で、一六〇四年ヴェネチアから出版せられたものであるが、年代が『十二夜』より後のものである上に、内容も亦、他の二篇よりも縁の遠いものである。『マニングムの日記を發見したハンター』は *Gl' Inganni* を探求してゐる中にゴンザーガの *Gl' Inganni*、その他四篇のイタリアの戯曲と共に一卷に收められた『だまされた人人』 *Gl' Inganni* といふ戯曲を發見した。一五三七年、ヴェネチアより出版せられたもので、作者は明らかでないが、その内容は *Gl' Inganni* と稱する他の二篇よりも『十二夜』のそれに近く、マニングムは恐らく *Gl' Ingannati* を誤つて *Inganni* と記したのであらうと考へるのが今日の通説である。『この戯曲は一八六二年、トマス・ラヴ・ピコックに依つて抄譯せられた。』『ニウ・ヴェリオーラム・シェイクスピア』の附録に

なつてゐる英譯とルースの書いた梗概を參酌しながら、*Gi Innamorati* の筋書を辿ると、大體次のやうなものである。

第一幕。舞臺はイタリアのモデナである。老商人ヴィルジニオにフアブリチオ、レリアといふ息子息女がある。フアブリチオは一五二七年のローマ劫略の中で踪跡が分からなくなり、當時十三歳であつたレリアは父に伴はれてモデナに移住したのである。この劇は一五三一年の謝肉祭の時に上演せられたのであるから、レリアは十七歳であつた。金持の老人ゲラルドがレリアとの結婚を望む。レリアの方ではフラミニオといふ男に思を寄せてゐる。ところが、フラミニオはレリアが一時モデナからゐなくなつてゐる間にゲラルドの女イサベルラに心を移す。レリアは假の宿であつた修道院を抜け出し、男装してフアピオと稱へ、フラミニオの小姓となり、フラミニオからの手紙をもつてイサベルラのところへ行くと、イサベルラは却つてこの使者を愛するやうになる。

第二幕。レリアはフラミニオに告げてイサベルラはその戀を受けつけなと言ふ。「あなたはこの國にあなたを愛してゐた者を見つけられることがないのであるか。ああ、

どうしてその人を棄てておしまひになつたのです。」フラミニオはイサベルラが驟かなのはむかし、自分がレリアを思つたことがあつたからであらう、と言ふ。「イサベルラに私はあの女を嫌つてゐると言つてくれ。」レリア「ああ。」フラミニオ「どうした……己に倚りかかるがよい……何處か痛むところがあるのか。」レリア「心が。」

第三幕。レリアの兄フアブリチオがその補導役ピエロと共にモデナへやつて来る。ピエロは慾の深い街學者で、この町の名所舊蹟を教へてやらうといふ。ヴィルジニオはレリアが小姓になつてフラミニオに仕へてゐることを知り、そのことをゲラルドと話してゐるところへフアブリチオがやつて来る。老人二人は男装したレリアであると思つて、フアブリチオをイサベルラの部屋に閉ぢ込めて了ふ。

第四幕。ピエロはヴィルジニオに、その息子フアブリチオはモデナに来て居り、「おろか」といふ宿屋に泊つてゐると言ふ。ヴィルジニオはそこへ行つて宿賃を拂はされるが、無論當の息子は影も形も見えない。ゲラルドはレリアに出會つて、その家から逃げ出したのであらうと思ひ、忽惶として歸つて見ると、フアブリチオとイサベルラは婚約

を交はしたと言ふ。

第五幕。一同ゲラルドの家に落ち合つて一部始終が明らかになる。イサベルラはファブリチオに満足する。フラミニオはレリアの乳母のクレメンティアから眞實を教へられて、再び昔の戀人を愛するやうになる。ゲラルドだけは對手を失つて歡會の仲間はずれとなる。

簡単な梗概ではあるが、これだけを見ても、『十二夜』の本筋に似たところは明白である。 *Gr. Ingamali* の序詞になつてゐる『手向草』 *Il Sacrificio* といふ詩集の中にはマルヴォリオの名を暗示したと思はれるマーレヴォルティ (Malevolti) があり、その名の意味は又、エイギュチークを暗示したのであらう、とルースは考へてゐる。男装のレリア即ちファビオはフェイビアンを暗示したのかも知れない。性格としては、ピエロとゲラルドとイサベルラを思ふ今一人の戀人ジリオを一つにすればマルヴォリオが出来る。ゲラルドとイサベルラの家婢、バスケルラとレリアの乳母クレメンティアを一つにすればマライアが出来る。ファブリチオの僕、ストラグワルチアにはフェストを豫想せ

しめるものやサア、トウビーになりさうなところがある。……と、これは皆ルースの推定であるが、たとひその通りではなかつたにせよ、シェイクスピアがこの戯曲を意識しながら『十二夜』の筋と性格の構想を廻らしたことは疑を容れない。

この物語はバンデルロ (Matteo Bandello) の『小説集』 *Novelle* 第二部第三十六話の源泉であり、そこからブルフォナー (François de Belle-forest Comingecis) の『哀話集』 *Histoires Tragiques, extraites des oeuvres Italiennes de Bandello, contenant dix-huit Histoires, traduites & enrichies outre l'invention de l'Auteur* の中に収録せられた。それとは又別にチンティオ (Giovan Battista Cinthio) の『百物語』 *De Gli Heatommiti* 第一部第八話の物語となり、バーナビー・リッチ (Barnabe Riche) の『軍職に告別す』 *Farewell to (the) Militarie Profession* (一五八一刊) の中に収録せられた「アポロウニラスとシラの物語」・「The History of Apolloneus and Sila」となつたものがある。「アポロウニラスとシラの物語」はコリヤアを始め、現代のシェイクスピア學者の中ではジー・ビー・ハリソン (G. B. Harrison)

などが『十二夜』の最も重大な藍本と考へてゐるものである。サイプラス(キュプロス)の公爵ポントスにシルヴィオとシラといふ兄と妹があつた。コンスタンティノウブルの若い公爵アポロウニウスがトルコ遠征の途上、サイプラスに立ち寄り、ポントスの許に滞在する間にシラは思を寄せるやうになり、アポロウニウスの立ち去つた後、僕しもべにドロの妹といふかたちで戀人のあとを慕ふ。海上、船長に言ひ寄られ、當惑してゐる時に暴風雨が起つて船は難破し、シラは船長の行李に縋つて外國の岸に辿り着く。女の姿ではいつ又どういふことが起るか分らないといふので、行李の中にあつた船長の着物を用ひて男装し、兄シルヴィオの名を稱へてアポロウニウスの宮廷に辿り着き、やがてその寵愛を受ける。アポロウニウスが富裕な未亡人ジュリナを戀してシルヴィオ即ち男装したシラを使者にすることや、ジュリナの方では却つて使者の方に心を奪はれることや、そこへ本當のシルヴィオが現はれてシラと取違へられ、ジュリナはそれと結婚し、アポロニウスは結局シラの思を容れるといふことなどは、*Gr. Ingannati* の筋と大同小異であるが、海上の暴風雨と船長の話、外國の岸へ辿りついて男装するといふやうな

ことはこの物語の新しいところであり、それが又『十二夜』の筋書の中に寄與したところも亦、明白である。しかしながら、バンデルロやチンティオはシェイクスピアはこの他の戯曲の藍本に用ゐたものであるから、もとより十分に参酌したと思ふ。ゴランツ (Gollanz) などはバンデルロが藍本であつたと考へてゐる位である。それに、シェイクスピアはイタリア語が讀めたのであるから、*Gr. Ingannati* を題材としたと考へられないこともない。曲中人物の名前が *Gr. Ingannati* や *Gr. Inganni* に由來することを考へると、寧ろ重大なものはイタリアの原本であり、その他のものもすべて一應は眼を通したと見るのが最も正鵠を得た推定であるやうに思はれる。尙、*Gr. Ingannati* にはスペイン語やフランス語に翻譯したものがあつて、フランス語からの重譯でラテン語に翻譯した *Laelia* と題するものは一五九四—五年、ケイムブリッジ大學クウィーンズ學寮の學生劇として上演せられた。シェイクスピアが *Laelia* の噂を聞いてゐたと考へることは可能であるが、それを題材としたと考へるのは早計である。マルヴォリオの翻弄といふ脇筋は大部分シェイクスピアの創意より生れたものと思は

れる。ルースの推定は一應考慮に値するものであるが、それにも拘らず、サア、トウビーやエイグチークやマライアの眞の原型ともいふべきものは、フォールスタフやスレンダアやミストレス・クイックリを創つたシェイクスピア独自の想像の世界に存在する。ハリスンは、この頃、悪魔調伏師として清教徒の間に流行したジョン・ダレル(John Darrell)の事件と一六〇一年サア、トマス・ポステュマス・ホウビー(Sir Thomas Posthumus Hoby)の家を騒がしたイョークシアの地主たちスコットランドの亂行がこの脇筋に暗示を與へたものと考へてゐる。ジョン・ダレルは宗教當局によつてまやかしものであると斷定、投獄せられ、その悪魔除けの秘法なるものは暴露せられたのであるが、宗徒の中には猶ダレルを擁護するものがあり、その一人であるジョージ・モア(George More)の書いたもの〔Discourse concerning the certain possession and dispossession of seven persons in one family in Lancashire 〔ランキャシアに於ける一つの家族の七人の人間が悪魔に憑かれ、又その悪魔が祓ひ除けられたることに關する論説〕〕の中からシェイクスピアは二三の着想、その中でもマルヴォリオの黄色の靴下といふ思ひつきを

借用したといふのである。サア、トマス・ホウビーも亦當時の清教徒、或は清教徒と目されてゐた偽善的な熱狂信徒であり、絶えず母親の威力に壓倒せられてゐる焦心短慮の小人であつた。レイデイ・シドニーと結婚し、その夫人を通してイョークシアに莫大な所領をもつてゐたが、イョークシアの地主たちは、とかくサア・トマスのすることが氣に食はぬ。そこで、一六〇〇年八月の或日の午後、狩獵に事寄せてその邸宅に闖入し、大亂痴氣をやつた結果が裁判沙汰となり、一六〇二年一月の星室廳スター・チェンバースに持ち出された。これが當時の問題となつてゐたので、シェイクスピアは早速「十二夜」第二幕第三場の底抜け騒ぎとマルヴォリオの罵倒といふ場面を作り上げて本筋の中へ織り込んだのであるといふ。観客が民事裁判といふやうな問題に特別の關心をもつてゐる法學士連であつたことを考へると、これらの推測はいよいよ可能性を加へて來る。とは言へ、これらのものを題材にしてマルヴォリオオ翻弄といふ素破らしい脇筋が出来上つたといふには餘りに些細なものであることも亦否定することが出来ない。尠くともこの部分の藍本になつたやうなものは存在しないのである。

四題名

『十二夜』が一六〇一—二二年の十二日節即ち神顯祭エピファニーの夜、上演せられるものとして作つたものであらうといふことは既に述べた。それ故にこの題名を選んだのであると考へることは自然な推定であるけれども、これには今少し外の事情をも考へなければならぬ。その中でも神顯祭エピファニーといふ祭日の傳説や風習はこの題名を決定する上に重大な關係をもつてゐる。「神顯」(Epiphania)といふ言葉はイタリアの俗信の中に轉訛してサンタ・ベファアーナ(Santa Befana 或は Befana)といふ聖女の名になつた。ベファアーナはキリスト降誕の時、その家を訪れた三人の賢王を歡待すべき筈であつたが、家事に追はれてその暇がなく、お歸りには閑になりませうから、必ずお立ち寄りを願ひます、と言つて送り出した。三人の賢王は、「マタイ傳」にあるやうに、神の御告げを受けて他の道から歸つたので、終に立ち寄らず、ベファアーナは毎年クリスマスから十二日目の夜を期して今か今かとその訪問を待つてゐる、といふのである。サンタ・ベファアーナは

サンタ・クロースのやうなものと考へられてゐた。イタリアの子供は十二日節の一夜を歡興の裡に過し、さて、寢室へ入つて行くと、その靴下や靴の中に玩具が入つてゐる。通例、誰か一人が先に立ち、あの子供らは「それ、ベファアーナだよ」「Ecco la Befana!」と叫ぶのが常である。

GP Ingannati の序幕の中にはこの十二日節の夜の歡興に言及したところがある。

“La favola e nuova non più per altri tempi vista ne letta ne meno altronde
cavata che della loro industriosa zucca, onde *si* cavorno ancho la Notte di
Befana le sorti nostre.”

『物語は新しきものにして、かつて見られしことも讀まれしこともなく、この手合の忙がしき頭よりベッファアーナの夜「十二日節の夜」、われひとの圖を引き出したものなる以外の如何なるところより引き出したるものにあらず。』

ルースは、これだけで十分題名の由來を説明することが出来ると言つてゐる。たとひ、十二日節の夜に上演するつもりでなくても、これはベファアーナの夜の座興のやうなもの

で、子供らしい大騒ぎを一つ御覽に入れたものだといふことになるであらう。シェイクスピアがさういふ心もちでこの題名を選んだものであるとすれば、そこには『大騒ぎ』*Much Ado about Nothing* や『冬物語』*Winter's Tale* を題とした心もちにもよほど近いものがある。これは又、一六〇二年の神顯祭ミコトウツリの夜の上演を意識したといふこととは必しも矛盾しないのである。

『十二夜』には *What You Will* といふ副題がついてゐる。その意味は「御意のままに」*As You Like It* と全く同じものであり、「お好きなやうに」「お好み次第」等いろいろに譯することが出来るけれども *Twelfth Night or What You Will* とつづけて讀む場合には「十二夜とでも何でも」といふやうな心もちが傳へられる。ジョン・マーストンも亦 *What You Will* といふ劇を作つたことがあるから、斯ういふ題名は當時珍らしいものではなかつたであらう。シェイクスピアは、題などはどうでもよろしいから、然るべく附けて置いて下さい、といふやうな軽い氣分でこの題名を選んだものと思はれる。チャールズ一世はその所藏してゐた二枚折本フオリオ第二版

の中のこの劇の題名を改めて「マルヴォリオ」と記してゐたといふことである。

五 構 造

『十二夜』は「御意のままに」のすぐ後に書かれたものであらう。この劇に於いてシェイクスピアの純粹喜劇は完璧の域に達した。ここにはこの劇を書くまでの喜劇に現はれた殆んどすべての着想と特徴を發見する。難破より再會に至るまでの奇譚、双生兒の相似に依るまちがひの喜劇、外國を探索する船長、その親切と俠氣などが「まちがひの狂言」以來のものであることは言ふまでもない。ヴァイオラの變装は、「ヴェローナの二人公達」に於けるジュリアの變装に酷似してゐる。「ヴェニスベニスの商人」に於けるポーシャ、ネリッサ、ジェシカ、「御意のままに」に於けるロザリンドが、男裝の麗人であることも亦、直ちに念頭に浮ぶ。この喜劇を通じて終始音樂の調しらべの漾ふところは「ヴェニスの商人」や「眞夏の夜の夢」に髣髴たるものであり、セバステイアンを助

けた船長の名がアントニオであるところなども、「ヴェニス商人」に於けるアントニオを想起せしめる。ヴァイオラの胸ふかくかくした戀の告白は「戀のむだ骨」第五幕第二場に於けるキャサリンの臺詞に呼應する。サア、トウビーやエイギューチークやマライアの性格にフォールスタフを始め、これまでの喜劇に活躍したシェイクスピア獨特の人物がその近似性を傳へてゐることは既に述べた。さう言へば、この劇のフェストや「リア王」の道化に於いて完成の域に達した道化役も亦、シェイクスピアの喜劇と悲劇を一貫する所の發達の迹を示してゐる。斯ういふ風に逆連鎖を辿つて行くと、殆んど際限のないことであるが、「十二夜」に於いて特に著しいことは、それらのものがそれぞれの適當な地位を守つて相侵さず、オパールの水のやうに渾融して一つのものとなり、洗練の極致に達してゐるといふことである。喜劇と悲劇の結合なども「大騒ぎ」に於ける如く截然たる區別を示してゐない。「十二夜」に於ける悲劇は歡笑の上を蔽ふ所の疊りであり、薄紗である。イタリアの海のあらしより打ちあげられた双生兒、セバステイアンとヴァイオラの數奇な運命を取扱つて、これをその國の領主、公爵オーシー

ノウのかなはぬ戀の對手、裕福な伯爵家の世嗣のむすめオリヴィアとの交渉の中に織込み、その間にオリヴィアの伯父サア、トウビー・ベルチと、その友人で、これもオリヴィアに心を寄せてゐるサア、アンドルー・エイギューチーク、僕フェイビアン、侍女マライア及び道化役のフェストなどが寄つてたかつて正直者の家令マルヴォリオを騙弄するといふ一段の脇筋を組入れたものであると言へば、大體この劇の脚色を説明したことになるであらう。従つて、この劇も亦、強いて分析すれば悲劇的な方面と喜劇的な方面に分つことが出来ないのではない。二つの方面の中、話の筋より言へば、悲劇的な方面の方が主要なものであるに拘らず、劇全體の興味は喜劇的な方面に集中せられてゐる。この點はシェイクスピアの他の喜劇にも屢々認め得べきものであるが、この劇に於いては兩者の融合が極めて自然であり、かつ、微妙である。その點を説明するためには、今少し物語の内容に亘つて、これらの人物の性格を考へて見る必要がある。

六性格

ヴァイオラは男装して公爵の宮廷に入り、人知れず公爵に思を寄せながら、その戀の使者としてオリヴィアを訪れる。今まで公爵の戀を斥けてゐたオリヴィアはシザリオと名乗るこの新しい使者を見るに及び、女であるとは知らないで、却つて使者の方に心を動かす。サア、トウビー・ベルチの手引に依り、オリヴィアをわが物としようと思つてゐるサア、アンドルー・エイゲチークは元來魯鈍の性ではあるが、この有様を見てさすがに嫉妬の情にたへなくなり、サア、トウビー、フェイビアン、及びフェストの力を借りてヴァイオラに決闘を申込む。こちらは女の身、何とかして窮境を遁れようとするけれども對手は頑として承知しない。——尤も、サア、アンドルーの方でも、サア、トウビーの惡戯いたづらに依つてヴァイオラを大した劍客であると思ひ込み、内心甚だびくびくものである。いよいよといふ段になつた時、セバステイアンを救つた船長アントニオが跳び込んで来て、ヴァイオラの急を救ふと共に、曩に公爵の船と海上で争があつた時の宿怨

に依り、あとをつけて來た警吏の手に捕縛せられる。このアントニオはあまり活躍する人物ではないが、そのセバステイアンに對する男らしい友情と義侠は何となく寶曆以後の歌舞伎に屢々見る男達のやうな者を偲おもはしめる。白井權八と幡隨院長兵衛——『鈴が森』に比較するのは無理かも知れないが、ヴァイオラを救ふ時、

Antonio Put up your sword. If this young gentleman have done offence, I
take the fault on me: If you offend him, I for him defy you.

アントニオ 劍を收めて下さい。この若い方が間違まちがをせられたのでしたら、私が代つてその咎とがめを受けます。あなた方が不法をしむけるのであれば、私がお對手になります。

とある臺詞などを讀むと『お若えの、待たつしやりませ。』とでも言ひさうな人物を想ひ起さすにはゐられない。ヴァイオラに對つてセバステイアンに預けておいた財布を要求するところなども大分歌舞伎がかつた場面である。アントニオとヴァイオラが舞臺より去つた後へ本物のセバステイアンが現はれて、今度はサア、アンドルーとサア、ト

ウビーを散散に打ち懲らし、調停に入つたオリヴィアの愛をいぶかしみながらも有耶無耶のうちに結婚を承諾する。セバステイアン自身はもとより自分がヴァイオラにとり違へられてゐるとは思はない。サア、アンドルーもサア、トウビーも、又、オリヴィアも、セバステイアンがヴァオラでないといふことは知らないのである。斯うして公爵のオリヴィア訪問といふことになり、この二人のまのあたりにヴァイオラとセバステイアンが並んで立つた時、ここに始めて一切の事情が明らかになり、その結果、公爵はヴァイオラの戀を容れ、オリヴィアはセヴァステイアンと結婚する。これだけでも悲劇と喜劇とは極めて巧妙に結びついてゐるのであるが、尙その上にこの劇の喜劇的效果を高めてゐるのは侍女マライアと家令のマルヴォリオを主役とするマルヴォリオ醜弄の場面である。この場面が如何に重要なものであるかといふことはジョン・マニングガムの日記を見ても明らかであり、この劇が書かれてから後、二十年の間「十二夜」は屢、「マルヴォリオ」と稱へられ、チャールズ一世が題名を改めて「マルヴォリオ」と書いたといふことを見ても分る。——チャールズ一世がマルヴォリオに興味をもつたのは清教徒に對する敵意

にも關係があつたものと思はれる。——マルヴォリオは清教徒の名を與へられてゐるほどの堅氣者で、又決して愚人ではないが、とにかく、自分位正しい者はないと思つてゐる。サア、トウビーとサア、アンドルーの亂暴な酒宴を咎めたのが癪だといふので、豫てよりサア、トウビーに意を通じてゐる侍女マライアは、このマルヴォリオの自惚うぬづれにつけ込み、オリヴィアの手跡に似せた手紙を書いて、わざとマルヴォリオの通るところへ棄てておく、といふ計畫を立てる。この術策見事に成功して、マルヴォリオは早くも伯爵になつた時の事を考へながら、オリヴィアの前に進んで來る。黄色い靴下、さしちがへの靴下止め、にたにた笑ひながら、オッホンと反身そりみになつて、驚いた女主人の前に臆面もなくやつて來るところは偽書の中の注文通り。結局、オリヴィアの面前を追はれ、サア、トウビーの仲間に依つて狂人の取扱を受け、座敷牢にたたき込まれ、その上、道化のフェストが僧侶の聲色を使つて外から嘲弄する、といふやうなことがある。この芝居の終る頃になつてやつと愛目をまぬがれる。マルヴォリオの性格については「舊い俳優の或人人に」On Some of the Old Actors」と題するエッセイの中に、チャールズ・ラ

ムの言つた言葉が恐らく最も當を得たものであらう。

“He is cold, austere, repelling; but dignified, consistent, and, for what appears, rather of overstretched morality. Maria describes him as a sort of Puritan; and he might have worn his gold chain with honour in old round-head families, in the service of a Lambert, or a Lady Fairfax. But his morality and his manners are misplaced in Illyria. He is opposed to the proper levities of the piece, and falls in the unequal contest.”

『彼は冷たくて、嚴格で、面白くない男である。しかし、威儀があつて、言行の一致した、見かけは、多少誇張した道徳をもつた男である。マライアは彼を一種の清教徒として説明してゐる。で、ラムバートとか、レイデイ・フェアファックスとかいふ人に仕へるわが古の短髮黨の一人としての金鎖を帯びても、然るべき體面を保ち得たであらう。が、イリリアではその道徳と行狀が處を得なかつた。彼はこの戯曲本來の軽い氣分に反對なものであり、互角でない勝負に於いて敗北する。』

斯う言つた後、更に數百言を費してマルヴォリオの辯明を試みてゐるが、そこには本氣か茶目氣かちよつと分らないやうなところもある。唯、私がラムの遠見として推服するのは『十二夜』に於ける喜劇的興味の中心をイギリスの傳統の中に發見しようとしたところである。マルヴォリオの性格をオーシーノウ、オリヴィア、ヴァイオラを取圍む南歐の雰圍氣より引離して、これを劇文化の傳統に於いては全く違つたところに見ようとしたのは確かにシェイクスピアの喜劇的精神に觸れたものである。『マライアがミス・レス・クックリに似てゐたり、サア、トウビイがフォールスタフの規模の小さいものと思はれたり、サア、アンドルーがスレンダアを思はせたりするのも、それがこの方面の喜劇的精神に觸れたものであるからであらう。道化のフェストに至つては空前絶後ともいふべき出来榮で、これはシェイクスピアに於けるイギリス的なものとイタリア的なものの橋渡しのやうな役目をつとめてゐる。優婉なその歌と、機智の閃めきが思ひ切つた悪ふさげや生地のままの人間味にまじるところには、この劇に於ける一種の統一ともいふべきものが感ぜられる。『十二夜』の喜劇的精神はフェストであると言つても過言で

はなからう。

オーシーノウ、オリヴィア、ヴァイオラはシェイクスピアに於ける exotic な要素がいつもさうであるやうに、comedy といふよりも poetry を構成するものであり、又 romance に傾く所のものである。シェイクスピアの realism はその喜劇的精神と共に發揚せられ、その romance は poetry と共に流露する。『眞夏の夜の夢』や『ヴェニス商人』に於いて既にさうであつたやうに、『十二夜』に於いても前者は native elements の中に發見せられ、後者は exotic elements の中に發見せられる。ラムに依つて認められたイギリス的要素は主として性格の上の事であつて物語の筋はイタリアの系統に従つてゐる。オーシーノウその他の性格は筋に従屬する性格であり、マルヴォリオやサア、トウビーは性格の方が筋を支配している。而もその間には微妙な調和があつて、イタリアの喜劇はやがてシェイクスピアの喜劇の表面を彩るものであり、イギリス本來の喜劇はその内面の生命となつてゐる。公爵オーシーノウのセンチメンタリズムは必しもシェイクスピア自身の喜ぶものではなく、寧ろその「笑」の對象の一部を成す

ものであらう。しかしながら、第一幕第一場にオーシーノウの用ゐる言葉、

Orsino That strain again! it had a dying fall: O it came o'er my ear like the sweet sound, That breathes upon a bank of violets, stealing and giving odour.

オーシーノウ もう一度あの調しらべを！ あの調は絶え入るやうな音色ねいろをもつてゐた。あ、それは葦咲く堤の上を吹く妙なる音のやうに匂を、盗みながら、與へながら、わが耳に届いた。

とあるもの、或は第二幕第四場のヴァイオラの臺詞の中、“My father had a daughter.” 『私の父は女むすめをもつてゐました。』で始まる有名な一節などはシェイクスピアの poetry である。

七 邦 譯

明治四十二年十一月に戸澤姑射氏の『十二夜』が出版せられた。大正十年五月に坪内

逍遙博士の『十二夜』が出版せられ、昭和八年十月に同博士の『新修シェイクスピア全集』の中に收められた。Twelfth Night の邦譯にはこの二種があるだけで、その他には梗概のやうなものもなければ、研究、批評、鑑賞といふやうなものもない。『ハムレット』や『ヴェニス商人』には殆んど數へ切れないほどの文獻をもつてゐながら、純粹喜劇の絶巔に達したと言はれるこの戯曲が等閑視せられたのは日本のシェイクスピア學といふものが如何に偏つたものであつたかといふことを證明する。戸澤、坪内兩氏の翻譯については今更論議する必要はないと思ふ。この翻譯は第三回の試みであり、あらゆる見地より新しい計畫の上に立つものである。

十二夜

曲中人物

オーシーノウ　　イリリアの公爵。
セバステイアン　　ヴァイオラの兄。
アントニオ　　船長、セバステイアンの友。
ヴァレンタイン　　公爵に随侍する貴族。
キューリオ　　公爵に随侍する貴族。
サア、トウビー・ベルチ　　オリヴィアの伯父。
サア、アンドルー・エイギューチーク
マルヴォリオ　　オリヴィアの家令。
フェイビアン　　オリヴィアの家僕。
道化（フェステイ）　　オリヴィアの家僕。
船長　　ヴァイオラの友。

オリヴィア　　富裕なる伯爵嗣女。
ヴァイオラ　　公爵を戀する。
マライア　　オリヴィアの侍女。
貴族、僧侶、水夫、警吏、樂人、その他の従者。
舞臺。イリリアの或都。及びその近くの海濱。



公爵、樂人達を從へて登場。

公爵　音楽が戀の糧なら、續けてくれ。いやといふ程食べさせてくれ。食べあきて、食べたいと思ふ心が衰へ、やがて絶え果てて了ふやうに。もう一度、あの調を！　あれは絶え入るやうな音色をもつてゐた。ああ、あれは、匂を盗みながら、與へながら、薫咲く堤の上つらみに息づく微妙な音のやうに、わが耳に届いた。もうよし！　止めてくれ。どうも以前のやうにうつくしくない。

第一幕 第一場

ああ、戀の精靈よ！ そなたは何といふ捷い、氣の變り易いものであらう、そなたの度量は海をも容れるほどのものでありながら、どんなに確なもの、高い値うちのあるものでも、そこへ入つたが最後、瞬くうちに低落して卑しい價のものとなつて了ふ。戀は氣のもの、さまざまの姿を描き出すので、それだけでゐてもまことに氣まぐれなものだ。

キューリオ 殿さま、狩獵にお出かけになりませんか。

公爵 何をさ、キューリオ。

キューリオ 鹿でございます。

公爵 なに、それなら行つてゐるよ、私のもつてゐる最も立派なやつを狩り立ててゐる。ああ、この眼がはじめてオリヴィアを見た時、あの方に依つて空中の毒氣が潔まつたやうに思はれた。その瞬間に、この心はしか「鹿」と姿を變へられ、愛慾は烈しい、酷い獵犬となり、それ以來ずっと己を追迹して

ゐるのだ。

ヴァレンタイン登場。

どうだ、先方からの消息は？

ヴァレンタイン 遺憾ながら、お目通りは許されませんでした。唯、腰元の方からこのお返事を承つてまゐりました。七年の暑熱が過ぎて了ふまでは御空にも十分にはお顔をお見せにはならない。で、尼院の長のやうに、面帕をかけて歩くおつもり、日に一度、眼に沁みわたる潮の水でお部屋をお洗ひになります。これはみな亡くなられた兄上への愛を新にする爲、それを悲しい追憶の中に清らかなものとしていつまでも忘れないつもりでゐられる、と承りました。

公爵 ああ！ 一人の兄君にすらこれほどの愛の負債を支拂ふやうな奥床しい心をもつた女だ。あの貴い黄金の箭がその中に生きてゐるすべての他の愛を殺して了つた時にはどのやうに心ゆくばかり戀をすることであらう。肝臓も、脳髓も、心臓も、それら上なき心の高御座がすべて唯ひとりの王〔註。愛。〕の占むるところとなり、あの女のうつくしい、玉のやうな氣質で満たされる時には。さあ、香はしい花の床へ案内して行け。花や木立の衣笠で蔽はれた時にこそ戀の想はこちよく身を横へるのだ。

〔退場。〕

第二場 海 濱。

ヴァイオラ、船長、及び水夫登場。

ヴァイオラ 皆さん、これは何といふ國ですか。

船長 お嬢さん、これはイリリアですよ。

ヴァイオラ して、イリリアに何の用がありません。兄はエリジウム〔註。死者の樂土。〕にゐるのです。でも、運よく溺れなかつたかも知れませんね。水夫さんたち、どう思ひます？

船長 運よくあなただけが助かつたのかも知れませんよ。

ヴァイオラ ああ、可哀想なお兄さん！ 運がわるけりやさうかも知れないわ。船長 マダム、その通りで、その運で以てお慰め申し上げますなら、これは本當ですよ、私どもの船が難破致した後、あなたと、それから御一緒に命を完了した少數の者が押し流されて行く小舟に辿りついてゐられた時、見ると、お兄さんが危険に臨んでも用意怠りなく、勇氣と希望にその行を教へられ、海に漾うてゐた帆柱にからだを縛りつけてゐられました。そこで、ちやうどド

ルフィン 「註。海豚。」の背中の上のアライオン 「註。ギリシアの詩人。難波の後、海
豚に救はれて陸地に辿りついたと傳へられる。」のやうに、私の見ることの出来た間は
悠悠と波間を乗切つて行かれるのを見ました。

ヴァイオラ さう言つて下さることに對してこれはお禮の黄金こがねです。私自身の
助つたといふことが兄もさういふことになつたであらうといふ望を傳へてく
れます、そこへあなたのお言葉が頼みになるものとなります。この國を御存
知ですか。

船長 よく存じて居ります。私はここから三時間と行かないところに生れ、又
育てられた者ですから。

ヴァイオラ 誰がここを支配してゐられますか？

船長 評判も、氣立も、氣高い公爵。

ヴァイオラ お名前は？

船長 オーシーノウ。

ヴァイオラ オーシーノウ！ 父がその御名を言つたのを聞いたことがありま
す。その頃は獨身でゐられました。

船長 今でもさうです、でなけりや極最近までさうでした。ほんの一月前に私
はここを發つたのですから、して、その頃、(御承知のやうに下さまの者はと
かく上つ方のことを喋舌りたがるもので)公爵が美しいオリヴィアの愛を求
めてゐられるといふことはまだ人の噂に新しいことでした。

ヴァイオラ それはどうした方かたですの？

船長 徳の高い姫君、十二個月ばかり前に亡くなられた伯爵のお嬢さんです。
當時御子息の兄御に後見を委ねて逝かれたのですが、この方かたもやがて亡くな
られました。その兄上を思ふあまり、男との交際や對面をお絶ちになつたと
申します。

ヴァイオラ　ああ！　そのお姫さまにお仕へして機会が熟するまで私の身の上を世間に知らせないやうにすることが出来ればどんなにいいだらう！

船長　そりや容易には出来ませぬ、どんな願をもお聴入れにならない、それどころか、公爵の願ですら聴かないと仰有るのですから。

ヴァイオラ　船長さん、あなたは善さうな方のお見受け致します。

それに、自然は屢々美しい外壁を以て汚れたものを閉ぢ込めるのですが、あなたはこの美しい外面の表象に適はしい心をもつた方であると信じます。どうか（お禮は十分に致しますから）私の素性を隠して下さい、さうして私の趣意に適ふやうな假の姿をとる爲の力になつて下さい。私はこの公爵にお仕へしたいと思ひます。あなたはお側附として薦めて下さるのです。お骨折だけのことはあると思ひます。といふのは、私は歌を歌ふことが出来ますし、澤山の種類の樂器を奏でることが出来ますから、お仕へをするための十分な

資格を認めていただくことが出来ます。その他に起つて來ることは成行に任せます。唯、何も仰有らないで、私の考を果させていただきたいのです。

船長　あなたは側附におなりなさい、私は無言の從者になりませう。「註。」お

側附 (eunuch) も「無言の從者」(mute) も共に近東諸國の風俗に由來する。「舌が滑つたら、眼は見えなくなつてもよろしい。」

ヴァイオラ　あり難う。さあ、伴れて行つて下さい。

〔退場。〕

第三場　オリヴィアの館の一室。

サア、トウビー・ベルチとマライア登場。

サア、トウビー　兄貴の死をこんなと思ひつめるなんて、姪の奴め、一體全體ど

うしたつてんだい？ 本當に、くよくよするのは命とりだぞ。

マライア ほんたうよ、サア、トウビー、もつと夜早くお歸りにならないとい
けませんよ、姪御さま、私の御主人はあなたをよくない時間に對して大變に
御不興です。

サア、トウビー そこで嚴令か、まあ「前例は除外例」〔註。裁判上の術語。〕にしろ。
マライア 賛成、でも、少しは引締まつて下さらないといけませんわ。

サア、トウビー 引締める！ これ以上引締めることはないよ。酒を飲むにはこ
の着物をぐいと引締めてかかればいいのだ、この靴にしてもさうだ。これで
いけなけりや、手前の紐で首を締めるなり何なり勝手にしやがれだ。

マライア あのぐい飲みや、つづけ飲みは破滅のもとですよ。昨日も姫さまが、
そのことを言つていらつしやいました。それから求婚者になるとかで、いつ
かの夜お連れになつたうす鈍の士爵のことを。

サア、トウビー 誰？ サア、アンドルー・エイギューチークかい。

マライア さうなの、あの方。

サア、トウビー あいつはイリリアの何人にも劣らぬ偉丈夫だよ。

マライア それがどうしたと言ふのです。

サア、トウビー 年收三千ダカットをもつてるからな。

マライア さう、でもそのダカットを使へるのは一年きりでせうよ、大變な莫
迦で、金使ひが荒いのですから。

サア、トウビー さういふお前こそ莫迦だ！ あいつはヴァイオル・デイ・ギャ

ムボイス〔註。脚附大型の絃樂器。〕が弾けるぞ、一字一字まる暗記で三四ヶ國の
言語が話せるぞ、あらゆる天の寶物をもつてゐるぞ。

マライア ほんたうね、だから殆んど白痴〔博士〕だわ。だつて、莫迦である
上に大した喧嘩好でせう。喧嘩に逸やる心を鎮める爲の臆病風をもつてゐな

かつたら、間もなく墓の寶物をもつだらうと、前後の分る人たちは考へてゐますよ。

サア、トウビー この手に依つて誓ふ、あの男のことをそんなに言ふ奴らは悪黨だ、名譽犠牲「註。毀損」者だ。誰だい、そいつは？

マライア 尙その上に、あの方は毎晩あなたを對手に飲だくれになつてゐると言つてゐます。

サア、トウビー 姪の健康を祝して飲むのさ。己はこの咽喉に通り路があり、イリリアに酒がある限り、彼女のために盃を擧げるのだ。教區の大獨樂のやうに、「註。酷寒の時、村人の温を採る爲に各教區に備へた大きな獨樂。それを引つばたいて暖かくなる。」頭が足指の上でくるくる廻るまで飲まない奴は下司野郎だ。やい、女。

Castiliano vulgo! 「註。意味不明の出ためであるが、恐らく「機嫌を直せ」といふほどの心もちを述べたものであらう。」「廷臣論」の著者、バルダツサーレ・キヤステイリオネに言及し

たものであるかも知れないといふドウヴァ・ウイルスンの説には賛成しない。そこへサア、ア
ンドルー・エイギユフェイス「註。エイギユチーク。故意の間違。」がお見えになつた。

サア、アンドルー・エイギユチーク登場。

サア、アンドルー やあ、サア、トウビー・ベルチー！ どうだい、サア、トウビー・ベルチー！

サア、トウビー よう、サア、アンドルー！

サア、アンドルー ご機嫌よう、口悪さん！

マライア お互さま。

サア、トウビー 挨拶だ、サア・アンドルー、挨拶だ。

サア、アンドルー そりや何だい？

サア、トウビー 姪の腰元だ。

サア、アンドルー 挨拶さん、昵懇にお願ひ申す。

マライア 私の名はメアリ〔註。マライアの畧稱〕ですよ。

サア、アンドルー メアリ、挨拶さん――

サア、トウビー 士爵ナイト、そりや間違つてゐるよ。『挨拶』つてのは面かたと向きむき對たいふの
だ、乗り込むのだ、口説くはなくのだ、襲撃するのだ、この女を。

サア、アンドルー そいつはどうも、この御連中〔註。觀客。〕の前ではちよつと
出來ないな。『挨拶』つてのはさういふことかね。

マライア 皆さん、さやうなら。

サア、トウビー かうして手離して了ふ位なら、サア、アンドルー、貴公のやう
な意氣地なしは又と劍つるぎを抜けなくなるがよからう。

サア、アンドルー かうして出て行くなら、お女中、己は又と劍つるぎを抜けなくなる

がいいぞ。別品さん、莫迦まがを對手たいてに有あつたと思つてゐるのが。

マライア あなたの手は持つてゐませんよ。

サア、アンドルー そら、ここにある。これが私の手だ。

マライア さあ、ね、『思はままよ』と申します。この手は酒棚の上へもつて行
つてお酒を飲ませておやりなさい。

サア、アンドルー 何故だい、ねえさん。何だい、お前の警諭たごひは？

マライア この手は乾涸ひかびてゐます。〔註。濡れ事には向かない、との意。〕

サア、アンドルー さうだらうとも、手を乾かして置かないやうな莫迦まがぢやない
からな。だが、お前の洒落しやれは？

マライア 乾かわ〔空〕洒落しやれよ。〔註。内容のない、莫迦げた洒落だ、との意。〕

サア、アンドルー お前、そんなもので一杯になつてゐるのか。

マライア あいよ、指の先まで一杯だわ。さあ、お手を離します、すると、私

は品切れよ。

〔退場。〕

サア、トウビー おい、士爵！ カナリー酒の一盞が足りないな。いつになくへこまされたぢやないか。

サア、アンドルー こんなことは始めてだらう、カナリー酒でへこまされたのでなければな。己やどうかすると一介のキリスト教徒か、あたりまへの男以上の智慧をもつてゐないやうな気がする。これで牛肉は大に食つてゐるのだ、で、そいつが智慧の方に害をするらしい。

サア、トウビー 疑を容れないね。

サア、アンドルー そこへ気がついたら、やめるのだつた。サア、トウビー、己は明日馬で歸るよ。

サア、トウビー Pourquoï, 「註。何故だい。」親愛なる士爵？

サア、アンドルー 何ださ、pourquoï つてのは。行れといふのか、行るなとい

ふのか。撃劍や舞踏や熊いぢめをやつてる暇に語學でもやつて置けばよかつたと思ふよ。ああ、古典でも勉強するところだつたなあ！

サア、トウビー 饒〔古典〕を勉強すれば、髪の中の立派な頭をもつただらう。

サア、アンドルー え、それで髪がよくなるのかい。

サア、トウビー 無論だよ、髪は自然にちぢれるものぢやなからう。

サア、アンドルー でも、これで己には結構似合つてたらう、どうだ？

サア、トウビー 素敵だ。紡竿の上の亞麻のやうにぶら下つてら。お家婦が股ぐらの間に挟んで紡ぎとるところが見たいもんだ。

サア、アンドルー 本當に、明日は歸るよ、サア、トウビー。姪御は顔を見せな
いし。見せたところで九分九厘まで己は嫌だと言ふだらう。この近くにゐる
公爵が思を寄せてゐられるのだ。

サア、トウビー あいつは公爵なんか對手にしないよ。位にしる、身分にしる、

齡にしる、智慧にしる、自分より上の者とは縁を結ばないつてんだ。さう言つて誓つてるのを聞いたことがある。莫迦な、これにはまだ脈があるんだぜ。サア、アンドルー もう一月滞在するか。己はよつほど妙な氣もちの男でね。どうかすると假裝舞踏や亂痴氣騒ぎに没頭して了ふのだ。

サア、トウビー 士爵、貴公はあいつた時間つぶしがうまいのかい。

サア、アンドルー イリリアちや負をとらん、誰だらうともだ、目上以下の者ならばだ。尤も玄人には較べたくないがね。

サア、トウビー 三拍子踊ちやどんなのが得意だい、士爵。

サア、アンドルー ケイバ「高跳」だよ。飛切をやるね。

サア、トウビー 飛切上等、ケイバ「花菜」のソース。こちらは羊肉を切るとするか。「註。ケイバ即ち花菜のソースと羊肉は調味上の合ひものである。」

サア、アンドルー 逆跳もうまいつもりだ。イリリアちや誰にも劣らない位しつ

かりしたものだ。

サア、トウビー どうして又、こんな事を隠して置くのだ？ どうして又、かういふ才能の前に幕を垂れて置くのだ？ ミストレス・モール「註。當時有名な女賊であつたメアリ・フリス、通稱モール・カットバース（巾着切）の事。」の似顔繪のやうに埃がつかつてわけかい。何故貴公は三拍子踊でお寺へ詣り、走り踊で歸つて來ないんだ。己なら一寸歩いても早踊でやる。小便をするにも五步調でなくちやしないよ。貴公は一體どういふ量見なのだ？ この世の中は人の美德を隠しておくところかね。貴公の素破らしい脚の出來工合を見た時から、こいつはど

うしても三拍子踊の星の下に生れたものだとは思つてゐたよ。
サア、アンドルー さうさ、しつかりしたものだ、ものすごく赤い靴下がよく適るんだ。一つどんちやん騒ぎをやらかさうか。

サア、トウビー やらかさなくつてさ。こちとらは金牛宮の下に生れたのぢやな

いか。

サア、アンドルー 金牛宮？ そりや脇腹と心臓を司る星だ。

サア、トウビー なあに、脚と太股だよ。飛切をやつて見せる。ハー、もつと高く。ハ、ハー、うまいぞ。

〔退場。〕

第四場 公爵邸の一室。

ヴァレンタイン及び男装せるヴァイオラ登場。

ヴァレンタイン この後もこのやうに公爵のお氣に召すやうだつたら、シザリオ、お前さんはよほど立身するだらう。お目にかかつてから三日にしかならないのに、もうお前さんは他人ぢやないのだから。

ヴァイオラ おいつくしみが續くことなどを問題にせられるのは御機嫌の變ることを心配しゐてられるのか、私が不行届な事でもすると思つてゐられるのでせう。殿さまは氣の變り易いお方ですか。

ヴァレンタイン いや、それは大丈夫だ。

ヴァイオラ あり難う。そこへ公爵がお見えになりました。

公爵、キューリオ、及び従者たち登場。

公爵 おい、シザリオは會つた者はゐないか。

ヴァイオラ 私は伺候致して居ります、これに。

公爵 お前たちは暫く遠慮してくれ。シザリオ、お前はもう萬事を心得てゐる。私はお前に内證の心の書をさへ留金を外してうちあげた。だから、お前ひと

つあの女ひとのところへ出向いてはくれまいか。断られても退くな、門口に立つて居れ、拜謁を許されるまでは根を下した足がそこに生えるのだと言ふがよ
う。

ヴァイオラ　でも、殿さま、人の申しますやうに、悲しみにうちくづをれてゐられるのであれば、きつと私には逢つて下さらないだらうと思ひます。

公爵　號かめいてやれ、不首尾で歸つて来るよりは、一切の禮儀作法を乗り超へる。ヴァイオラ　お話することが出来たと致しましたら、殿さま、その時は？

公爵　おお、その時はわが思の丈たけを述べるのだ。この切せつなるまごころを語り、それでもつて茫然自失せしめるのだ。これを行なるのはお前によく適あはつた仕事であらう。まじめな顔をした使の者よりもお前の若い姿に心を惹かれるであらうから。

ヴァイオラ　さうは思へませんが。

公爵　いや確かにさうだよ、まだお前が成年せいねんだと言ふやうなものはそのうら若い年齢としを見違えてゐるといふものだ。ダイアナ註。ギリシア處女神。の唇くちびるでもそれ以上に滑らかな、紅玉の色をしたものではない。お前の小さな咽喉のどは生娘なまむすめの聲の器官のやうに甲高かんだかで、聲變こゑかへりりがしてゐない、それに何處から何處までもお前は女形おんながたにそつくりだ。私にはお前の宿命の星がこの役にうつつつけのものだといふことが分つてゐる。誰か四五人これに供ともをして行け。望のぞなら、皆でもよい。私は對手が尠すくなくければ尠すくなくいほどいいのだ。これをよく仕竟しまはふせるのだぞ、さうすれば主人の財産はお前のものも同じやうに氣ままに暮らさせてやるから。

ヴァイオラ　微力を盡してその方かたの心を動かして見ませう。「旁白」でも、妨害さまたげの多い盡力だわ！ 誰を口説くはくにせよ、この人の妻になりたいのはこの私なんだもの。

〔退場。〕

第五場——オリヴィアの館の一室。

マライアと道化登場。

マライア　いいえ、何處へ行つてたか、それを言ふか、さもなければお詫びをするのに、毛一本入るほどにも口を開いてやらないから。家を外そとにしたのでお姫ひめさまはきつとお前を首吊りのお仕置になさるよ。

道化　吊るしていただきませう。この世でうまく吊るされたら縊死を恐れる要はないと申します。

マライア　そのわけを言つてごらん。

道化　醫師を恐れない、病氣にならないと言ふのです。

マライア　まあ、貧弱な返答ね、「旗臈を恐れず」といふ諺は何處から出たか教へてあげやう。

道化　何處からです、メアリさん？

マライア　戦争からだよ、旗臈は敵の旗なのよ、これだけはお前の莫迦噺の中で氣を大きくして言つてもいいわ。

道化　なるほどね、智慧のある者には智慧を賜へだ。阿呆の才を揮はしめよだ。

マライア　でも、こんなに長い間歸つて來なかつたのだから吊るされるよ。でなけりやおつぼり出されるよ、それぢや吊るされるのも同然ぢやないか。

道化　結構な首吊りで氣の進まない縁組を免れた例は尠くないね。おつぼり出されるなら夏にして貰ひたいや。

マライア　ぢやあ、覺悟は極めてゐるのね。

道化　といふわけにもあらず、だが、二つの點に就いては決心してゐる。

マライア 一つの點が切れたら、もう一つので持ちこたへる。兩方が切れたら股引だんぐりが落ちるつてわけかい。

道化 こりや圖星だ、てつきりその通り。さあ、あちらへいらつしやい。サア、トウビーが酒を止めたらお前さんはイリリアの誰にも劣らない智慧の廻つたエヴァの分身註。お内儀さん。暗にサア、トウビーとの結婚を諷す。になるだらう。

マライア お黙り、仕様のない奴やつ、いい加減におしよ。そこへお姫さまが來られた。伶俐にお詫びをするのだよ。それが一番だ。
〔退場。〕

道化 智慧よ、お前がその氣なら上手な莫迦をやらせてくれ！ お前を有つてゐると思つてゐる伶俐者はともすれば阿呆になつてゐる。お前を有つてゐないと確信してゐるこの己は智慧者で通るかも知れぬ。クイナペイラス言はずや、『愚かなる智者たらんよりも智慧ある愚人たるべし』と。

オリヴィア、マルヴォリオと共に登場。

道化 姫さま、御機嫌よろしう。

オリヴィア この阿呆をあちらへやつておくれ。

道化 者ども、聞えたか。姫さまをあちらへお伴れ申せ。

オリヴィア 何を言つてゐる、お前は乾莫迦からばかだよ。もうお前には用がない。それに、お前は不届な奴だ。

道化 二つの過失あやまち、マドンナ、「註。イタリヤ語。マダムに同じ。」そいつは酒とお叱責ちしやくで直ります。乾莫迦に酒を下さいますと、その時、阿呆は乾からびては居りません。不届な奴にはその不届を直せと仰有るのです。直せば、其奴そやつはもう不届ではございません。直すことが出来なければ、仕立屋に直させるがよろしい。直つたものは何でも皆補綴つぎはぎがしてあります。罪を犯すやうな徳は罪で補綴つぎはぎがして

あります。直すやうな罪は徳で補綴つぎはぎがしてあります。この單純な推論式がお役に立てばそれでよろしい。立たないとあれば、どういふ療法があります？ 欺される夫は災難の外にはないのですから、そこで、麗容花の如しと申します。

〔註。オリヴィアは自ら災難を夫として、はかない孤獨を守つてゐるが、やがてその夫を欺して戀をするに極つてゐる、麗容花の如くうつろひ易いことを知らずに超然としてゐるのは阿呆だ、との意。

この道化の諷刺は微妙で、捕捉し難いやうな趣をもつたのが特徴である。〕 姫ひめさまは阿呆を伴つれて行けと仰せられた。だから、もう一度言つて聞かせる、姫ひめさまをお伴つれ申せ。

オリヴィア これ、私はお前を伴つれて行けと言つたのだよ。

道化 最大級の誤解です。姫ひめさま、*cucullus non facit monachum* 「僧帽僧を作らず」と申しましてな。これを釋とけば、私は頭の中に阿呆の衣装を着てゐないといふことになります。恐れながら、あなたさまが阿呆でいられること

を證明させていただきませう。

オリヴィア お前それが出来るかい。

道化 巧妙にやつてのけますよ、マドンナ。

オリヴィア 證明してお示みせ。

道化 信仰問答でやらなければなりませんよ、マドンナ。さらば、婦徳の小鼠さん、御返答をなさりませう。

オリヴィア ぢやあ、まあ、他に鬱ふさ晴ららしになるやうなこともないから、お前の證明に辛抱してやるよ。

道化 マドンナ、そもそも何故なにゆゑの御愁傷ですか。

オリヴィア 阿呆、兄の死を嘆なげいてゐるのさ。

道化 マドンナ、あの方かたの靈魂は地獄にゐられると思ひます。

オリヴィア 阿呆、兄にいさんの靈魂が天國にゐられるのは知れたことだよ。

道化 兄上の靈魂が天國にゐられるのを嘆くとは、マドンナ、あなたさまの方がもつと阿呆です。方方この阿呆をお伴れ申せ。

70

オリヴィア マルヴォリオ、お前さんはこの阿呆をどう思つて？ 少しはよくなつたぢやないか。

マルヴォリオ さやう、斷末魔の苦しみがこいつをびくつかせるまで、よくなつては行きませう。智者を衰弱させる病がいつもよい阿呆を作るのですから。

道化 神、あなたに速かなる病を授け給ひ、あなたの阿呆が愈、加へられることを祈ります。サア、トウビーは私のことを狐ぢやないと誓言せられる、が、

あなたのことを莫迦ぢやないとは二ペンスの賭でもなさいませんよ。

オリヴィア あれに對して何と言ふの、マルヴォリオ。

マルヴォリオ あなたさまがこんな能なし猿をちやほやなさせるには呆れて居ります。この間もこいつは石のやうな頭しかもつてゐない市井の阿呆にやり込

められてゐました。ごらんなさい、もう既に隙間だらけです。あなたさまが笑つておやりになり、物を言ふ機会を與へておやりになるのでなければ、この男うんともすんとも言ふことが出來ないので。私は斷言します。斯ういふ小細工を弄するやうな類の阿呆に大笑をせられるお伶俐な方方は阿呆の下廻りに過ぎない者であると。

オリヴィア まあ！ マルヴォリオ、お前は又己惚で病みついてゐる、だから何を食べてもおもしろくないのだ。心がひろびろとしてゐて、疚ましいことがなくて、こだはらない氣性の者なら、お前には火筒の彈丸とも思はれることが鳥を射る箭位にしか考へられないのだよ。天下御免の阿呆なら、嘲弄以外のことは何もしなかつて、その言ふことに誣告はない、人に知られた愼慮の者なら、咎め立て以外のことは何もしなかつて、その言ふことに嘲弄はないのだからね。

71

道化 さあ、マーキユリ「註。ここでは嘔吐きの神。」の御利益（ニリキ）で虚言（ウソ）上手になられ
ますやうに、阿呆をよく言つて下さるのですから！

マライア登場。

マライア マダム、御門（ごもん）へ若い侍士（おきむらひ）の方がまゐつて拜謁を願つて居りますが。

オリヴィア オーシーノウ公爵から、さうかい？

マライア それは存じません。美しい青年で、供揃（ともぞろひ）も立派です。

オリヴィア 家の者では誰が應對に出てるの？

マライア 伯父御さま、サア、トウビーでございます。

オリヴィア 連れておいで、後生だから。狂人（きやうびん）見たいなことしきや言やしな

いよ。困つた人だ！

〔マライア退場。〕

マルヴェリオ

お前行つてね。公爵からの戀のお使なら私は病氣、でなけりや不

在、何でもいいからお断りをするのよ。

〔マルヴェリオ退場。〕

さあ、分つただらう、お前の阿呆三味も古くなつて評判が悪いね。

道化 マドンナ、あなたさまはまた御長男が阿呆であられるかのやうに私ども
を辯護して下さいました。ジョウヴ、その御長男の頭蓋骨に逝きたま脳髓を
満したまへと祈ります。ほら、そこへやつて來られたお身内の一人なんかは
最も弱い脳膜をもつてゐられるのですから。

サア、トウビー・ベルチ登場。

オリヴィア どうでせう、半醉（なまよひ）で。伯父さん、門へ來てるのは誰ですか？

サア、トウビー 紳士さ。

オリヴィア 紳士！ どんな紳士です？

サア、トウビー 紳士で、げえいぶ——えい、鯀（ヒシ）の鹽漬（しほづけ）が崇（たか）りやがる！ どうでえ、拔作（ぬきぞく）！

道化 やあ、サア、トウビー！

オリヴィア 伯父さん、伯父さん、まだお若いのに、毫（ちと）碌（ろく）せられたのですか。

サア、トウビー 碌（ろく）でもねえ！ 妄想（まぼろし）は起さねえよ。門（かど）にゐらあな、ひとり。

オリヴィア だからさ。誰（たれ）ですか、それは？

サア、トウビー 悪魔（あくま）にして置け、悪魔（あくま）だと言ふなら、構（かま）やしねえ。こちや信心

があればよい、とさ、己（おれ）さまが仰（おほ）有（り）るんだ。が、まあ、どうだつていいさ、そんな事は。

〔退場。〕

オリヴィア 阿呆（おろちや）や、醉漢（のんざくれ）が似（に）てゐるのは何（なに）だらうね。

道化 溺死（おどし）人、阿呆（おろちや）、それから狂人（きやうじん）に似（に）てゐます。微醉（ほろよ）以上の一杯は阿呆（おろちや）にし

ます、二杯目は氣を狂はせ、三杯目はづぶろくの土左衛門にしてしひます。

オリヴィア お前検屍人（けんしじん）を呼びに行つておくれ、伯父さんを調べて貰ふのだから。醉（のん）だくれの第三期に入つてゐるのだ、溺死（おどし）だよ。さあ探しておいで。

道化 まだ狂人（きやうじん）程度（ていど）ですよ、マドンナ。そこで阿呆（おろちや）が狂人（きやうじん）のお目附（めつけ）けとござい。

〔退場。〕

マルヴォリオ再び登場。

マルヴォリオ マダム、あすこにゐる若い男は誓つてあなたさまと話をすると申します。御病氣だと申しました。すると、そりや分つてゐる、だから話をしに来ると申します。寝てゐられると申しました。それも豫（あらかじ）め知つてゐたやうで、だから話をしに来ると申します。何と言つてやつたらいいでせう。何と

言つて断つても頑として聴かないのです。

オリヴィア 話をさせてやらないと言へばいい。

マルヴォリオ さう言つてやつたのです。すると警吏の標の竿のやうに戸口に突立つてゐやう、ベンチの支棒にもならう、が、あなたとはどうしても話をすると申します。

オリヴィア どんな種類の人？

マルヴォリオ やはり、人類で。

オリヴィア どんな容儀の人？

マルヴォリオ 行儀は極わるい、否でも應でも話をするといふのですから。

オリヴィア どんな人柄で、年齢はどの位？

マルヴォリオ 一人前の男といへる程年をとつてはゐず、少年といへる程若くもありません。豌豆になる前の莢豌豆、林檎になる前の青林檎といったやうな

者です。少年と青年との間、満干なしの潮候遅滞といつたら、あの男のことになりませう。なかなか好男子で、極めて口巧者な奴です。お母さんのお乳がまだ口の中に残つてゐると思はれる位です。

オリヴィア 通しておやり。腰元を呼んでおくれ。

マルヴォリオ 腰元さん、お呼びですよ。

〔退場。〕

マライア再び登場。

オリヴィア 面帳をとつておくれ。さ、顔へかけておくれ。もう一度オーシーノウのお使者の口上を聞くでしょう。

ヴァイオラと従者たち登場。

第一幕 第五場

ヴァイオラ この館のお姫さまといふのはどちらです。

オリヴィア 私に話しなさい。私がおの方に代つて返事をしてあげる。御用は？

ヴァイオラ ivotも輝かしく、いみじく、たぐふかたなく麗はしき君よ、——だが、お願いです、これはこの館のお姫さまかどうか教へて下さいな、私はただお目にかかったことがないのだから。私の臺詞を無暗に投げ棄てるのは嫌です。とても旨く書いたものである上に、私も大層骨を折つて覺えたのですから。お美しい方方、輕蔑なすつては困ります、ほんのちよつとした冷遇に對しても私はそりや敏感なのです。

オリヴィア 何處からおいでになりました？

ヴァイオラ 私は稽古をしてまゐつたこと以外には殆んど何も申し上げることは出来ないので、して、その御質問は私の役割の中には入つてゐません。

貴婦人、若しあなたがこの館のお姫さまであられるなら、何かちよいとした證據を示して下さいませんか、さうすれば臺詞をつづけけます。

オリヴィア あなたは喜劇役者なの？

ヴァイオラ 恐ろしい眼力ですね、でも、さうではありませんよ。尤も、どんなに邪推せられたつて、私が今演じてゐる者でないといふは誓つて申し上げます。あなたがこの館のお姫さまですか。

オリヴィア 自分で自分を篡奪してゐるのでなければ私はそれです。

ヴァイオラ あなたがその方なら御自身を篡奪してゐられることは極めて確實です。與へる爲のあなたのもは取つて置く爲のあなたのもではないのですから。が、これは私の役目以外のことです。これから私は臺詞をつづけて、あなたを賞めたたへ、その上で、使の中心を申し上げることに致します。

オリヴィア 早く大切なところを仰有い。賞讃の方は宥してあげます。

ヴァイオラ ああ、それは残念です。ずるぶん骨を折つて稽古をしたのですし、それに詩的ですからな。

オリヴィア ぢや尙更いつはつたものでせう。どうかそれは納つて置いて下さい。あなたは門口で無禮をなすつたと伺ひました。お通ししたのはお話を聞く爲といふよりはどんな人か見て置きたいと思つたからです。あなたが狂人でなければ出て行つて下さい。道理の分つた人なら手短かに仰有い。こんな浮ついた對談の對手をするにはこちらのお月さまがその時季になつてゐないのです。「註。満月は狂氣に影響すると考へられてゐた。」

マライア 帆を上げられますか。水路はこちらですよ。

ヴァイオラ いいえ、掃除夫さん。まだ暫くここに碇泊致します。お姫さま、

この大女「註。マライアは小女である。ここでは故意にその逆を言つたものと思はれる。後にも同様の例がある。」を窘めてやつて下さいまし。

オリヴィア あなたの思つていらつしやることを仰有い。

ヴァイオラ 私はお使です。

オリヴィア きつと何か怖ろしいことを言はなければならぬのでせう、大層容體ぶつていらつしやるのを見たと。用を仰有い。

ヴァイオラ あなたにだけお耳に入りたいのです。別に戦を宣言するわけでもなく、貢を徴収するのでもありません。手には橄欖「註。平和のしるし。」を持つてゐます。私の言葉は十分道理の通つたものであると同じやうに、平和に満ちたものです。

オリヴィア でも、あなたは亂暴に事を始められました。あなたは一體何者です。どうしてくれと仰有るのです。

ヴァイオラ 當方の亂暴はお待遇から學びました。私が何者であるか、何を要求するかといふことは處女の秘密のやうに人聞を嫌ひます。あなたのお耳に

は靈驗いやちこなものです。他人が聞けば神に對する穢れとなります。

オリヴィア　ここを私たちだけにしておくれ。このいやちこといふものを聞かうよ。
〔マライア、從者たちと共に退場。〕

さあどうか。本文は何といふのです。

ヴァイオラ　いとも美しいお姫さま――

オリヴィア　ありがたい御教だこと、これに就いちやずるふんいろんな事が言へるわね。その本文は何處にあるの？

ヴァイオラ　オーシーノウの胸に。

オリヴィア　あの方の胸に！ あの方の胸の何章に？

ヴァイオラ　この方法に従つてお答へしますと、その心の第一章にあります。

オリヴィア　ああ！ それなら讀みました。あれは異端の教です。もう何も言ふことはなくつて？

ヴァイオラ　マダム、お顔を見せて下さいまし。

オリヴィア　私の顔と談判するやうに言付けられていらしたのですか。今度は本文から逸れましたね。まあ、幕を引いて肖像をお示せすることに致しませう。御覽なさい、當時はかうしてお示せするやうなものでした。よく出來てゐるではありませんか。

ヴァイオラ　秀逸です、神さまがすつかりおこしらへになつたのでしたら。

オリヴィア　生地のままですよ。雨や風にもよく耐ちます。

ヴァイオラ　これこそ順當に色を合せた美しさ、その赤と白とは自然の優婉かつ巧妙な手が彩筆を揮つたものです。お姫さま、あなたは世にも残酷な女ですよ、若しこのやうに美しいものを墓へもつておいでになり、世の中にその寫しをお残しにならないのでしたら。

オリヴィア　まあ！ 私はそんなに無慈悲な心のものではありませんよ。私は

自分の美のいろいろな目録を作ります。明細書にして家具一式すべて遺言状の追加の中に列記して置きます。例へば、一、かなり赤い唇二つ。一、薄鼠色の眼が二つ。但し、眶附。一、頸一つ。頤一つ、といったやうに。あなたは私を賞める爲に送られておいでだったのですか。

ヴァイオラ 私にはあなたがどんな方だかといふことが分ります。あなたは思ひ上つていられるのです。が、よしんば悪魔であるにせよ、あなたは美しい方です。私の殿さま、私の主人はあなたを戀してゐられます。ああ、その戀といへば、あなたが二つとない美の冠をつけた方であらうと、それでもつてやつと報いることが出来るといふほどのものだと思ひます。

オリヴィア どういふ風に戀してゐられるの？

ヴァイオラ 熱烈な愛慕で、潜然たる涙で、愛の雷を鳴り響かせる呻きで、烈火の吐息で。

オリヴィア 御主人は私の心を御存知です。私はあの方を愛することが出来ないのです。でも、あの方は徳の高い方だらうと思ひます、立派な方で、大した財産をもつた方で、清い、汚のない、若い方だといふことも存じて居ります。人の評判もよく、寛濶で、學問があまりになり、男らしくもあり、容姿と恰幅は美しいお人柄であると伺つて居ります。それでも私は愛することが出来ないのです。お返事はずつと前にさし上げることが出来たのです。

ヴァイオラ 私が若し主人のやうな愛のほむらと、あれほどの苦しみと、死に垂んとする生を賭してあなたを思つたのでしたら、そのお断りは意味をなさないと思ふでせう。了解しないだらうと思ひます。

オリヴィア ぢやあ、どうなさるお心算です。

ヴァイオラ 御門の側に柳「註。失戀のしるし。」の假小屋を設け、箆の中の思ふお方に呼びかけます。見棄てられた戀人の變らぬ誠に満ちた歌を作り、夜の

静けさの中にも聲高高と歌ひます。木魂こたまを返す山山にあなたのお名を遠く呼びかけ、空中にざわめき渡る聲聲に『オリヴィア！』と叫ばせます。さあ、さうなると、あなたは私を憐れんで下さらない限り、空と土との元素の間に
お休みになることが出来なくなりませす。

オリヴィア　大したことがお出来になるでせうねえ。あなたの御両親はどうした方かたです？

ヴァイオラ　私の運命以上の者ですが、私の身の上はこれで結構です。私は身分のある者です。

オリヴィア　御主人のところへお歸りなさい。私はあの方かたを愛することが出来ません。もうお使を下さらないやうに申し上げて下さい、尤も、この返事をどういふ風にお受けとりになつたかといふことを知らせて下さる爲にあなたがお立ちかへりになるのでしたら別です。さやうなら。お骨折は忝く存じま

す。これは私の志です。

ヴァイオラ　お姫さま、私は給料で雇はれてゐる飛脚ではございませぬ。財布はおしまひになつて下さい。報いられないのは私ではなく、私の主人です。

この後、お慕ひになる方の心を戀の神が礎石いしのやうに堅いものとして下さるやうに、あなたの熱愛が、主人のそののやうに、無慘にも見下げられるやうに、と祈ります！　美しい、冷酷な方よ、おさらば。
〔退場。〕

オリヴィア　『御両親はどうした方です？』『私の運命以上のものです、が、私の身の上はこれで結構です。私は身分のある者です。』お前さんがさうだつてことは誓言でもするわ。お前さんの言葉と顔と手足と仕草と氣性とは五つ重ねた紋章になつてゐる。いや、さう早まつてはいけない、靜かに、靜かに！——主人が召使でなければ……おや、私としたことが！　かう埒らちもなく疫病に罹るものだらうか。何だかあの若い人の申分のない資質が目に見えぬ微

妙な忍び足で私の眼から入つて来るやうに思ふ。まあ、さうさせて置かう。
これ、これ！ マルヴォリオ！

マルヴォリオ再び登場。

マルヴォリオ はい、マダム、これに居ります。

オリヴィア あの不法な使者、公爵の召使を追かけておくれ。否應なしに
この指輪を置いて行つたのだよ。こんなものは要らないと言つておくれ。御
主人の氣に入るやうなことを言つてくれるな、望をもたせるやうなことをす
るな、と言つておくれ。私やあの人には適かないのだから。あの若い者が明
日にもこちらへ来るやうならそのわけを話すからつてね。急ぐのだよ、マ
ルヴォリオ。

マルヴォリオ かしこまりました。

オリヴィア 私や何だかわけの分らないことをしてゐる、それに、目が惚れ込
んで考を負かして了ふやうなことになりはしまいかと心配してゐる。命運よ、
力をお示せ。私どもは自分のものぢやないのだ。定まつたことならさうなる
より仕方がない、ままよ、成行きに任せやう。

〔退場。〕

第二幕

第一場 海濱。

アントニオとセバステイアン登場。

アントニオ　これ以上滞在せられないのですか。私がお伴をしてはいけないと仰有るのですか。

セバステイアン　不躰ですが、さうなのです。宿命の星は暗澹として私の上を照してゐます。悪運の禍がことに依るとあなたの御運を亂すかも知れないのです。それ故にお暇乞をして、私は一人で自分の災難を背負ひ込まうと思つて

ゐます。その一つでもあなたに累を及ぼすやうなことがあれば御親切に對して相濟まないことになります。

アントニオ　では、お出でになる先を伺はせて下さい。

セバステイアン　いや、それもお許しを願ひます。私の目的は全くの放浪です。が、あなたのお心もちには隠して置かうとすることを、強いては尋くまいとする、行届た御遠慮のあることを私はよく存じて居ります。それ故に、私としては禮儀上寧ろこの身の上をうちあけなければならぬやうに思ひます。で、アントニオさん、ロデリゴと稱へてゐた私の名はセバステイアンであることを御承知下さい。父はメッサリーの市のセバステイアン、と言へばお聞及びになつたことは存じて居ります。亡くなりました後に残されたのが私と妹、二人は一つ時に生れた者です。天意がそこにあつたのであれば、世を終る時もさうであればよかつたと思ひます！ が、あなたのおかげでそれは

變りました。逆浪怒濤の中から救つて下すつた一時間ほど前に妹は溺死したのです。

アントニオ 可哀想なことをしましたな！

セバステイアン 私によく似てゐるといふことでしたが、それでも多くの人に依つて美人と考へられてゐた一人の貴女ですよ。賞めて言ふ人の判断をそのまゝに受け容れて、さういふことを埒もなく信じて了ふことは出来ませんが、これだけのことは言つてもよいと思ひます。妹はどんなに妬んでも美しいとしか言へない心をもつてゐたといふことです。妹は、あなた、もう既に海の藻屑となりました、が、私はその思ひ出を又しても鹹い水で溺らせるやうな氣もちになります。

アントニオ 酷いお待遇をして申しわけありません。

セバステイアン 何を仰有います、アントニオさん、いろいろ御面倒をおかけし

て濟まなかつたと思ひます。許して下さい。

アントニオ 情に絆されて死ぬるほどの思をさせないおつもりでしたら、私を僕にして下さい。

セバステイアン 既にして下すつたことを臺なしにしようと思はれないなら、つまり、折角助けたものを殺さうと思はれないなら、さういふ事を考へて下さいますな。すぐにお別れいたしませう。私の胸は切ない位です。それにまだ母親のやうなところがあつて、氣が弱くなつてゐますから、この上ちよつとした事でもあれば眼の方が一切お構ひなしに喋舌つて了ふでせう。私はオーシーノウ公の宮廷へ行かうと思つてゐます。さやうなら。

〔退場。〕

アントニオ あらゆる神神の擁護を祈りますぞ。オーシーノウの宮廷には大勢の敵がある。さもなけりや、近い中にそこでお逢ひするのだ。だが、何事が起らうとままよ、あなたを思へば危険なんか遊び事見たいなものだ、行くと

しよう。

〔退場。〕

第二場 街。

ヴァイオラ、その後よりマルヴォリオ登場。

マルヴォリオ あなたは今しがた伯爵家のオリヴィア姫と御一緒ではありませんでしたか。

ヴァイオラ 今のこと、お目にかかりました。あれからかなり急いで、やつとここへ来たところです。

マルヴォリオ この指輪をお返しになります。あなたが御自身でお持ちになればこちらの手間を省いていただけたのです。尚、御主人に姫さまはあんな人の

ところへ決して嫁かないといふことをしつかりと傳へて、この望を絶つていただきたいと申し添へてゐられます。それからもう一つ。これ以上、押してあの方かたの事では来て下さらないやうにとの事、尤も御主人がこれをどういふ風にお受けとりになつたかといふことの報告であれば別です。さあ、受けとつて下さい。

ヴァイオラ お姫ひめさまは指輪を受けて下さいました。私はいただきますせんよ。

マルヴォリオ これ、あなたは不作法にもそれを姫ひめさまに投げつけられた。で、姫ひめさまもさういふ風にお返ししろと仰有るのだ。身を屈かためて拾ふだけの値ねうちのあるものなら、ほら、目の前に横はつてゐる。でなけりや見付けた者が拾へばよい。

〔退場。〕

ヴァイオラ 私は指輪なんか置いて来やしない。あの方かたはどういふおつもりだらう？ 私の外側そとがはがあの方の心を迷はしたといふことなら以ての外ほかだ。大分

念入りに私を見てゐられた。さう言へば、目の方に夢中で、舌が動かなくなつたのぢやないかと思つたほどだつた、物を言ふ時にははつとして何だかとりとめもないやうなことを言はれたのだから。きつと私を思つてゐられるのだわ。戀の術がこの不躰なお使者を使つて私を誘き寄せてゐるのだ。御主人の指輪なんかいただかないですつて！ 指輪をあげるとも何とも言つてはゐられないのに。私が對手なんだ。若しさうだとすると、又さうなんだが、お可哀さうにお姫さまは夢を戀した方がました。身を惜すつてことも今となれば罪なことだつた、氣の許せない敵がよく行くことなんだもの。美男で二心のある者なら、女の蠟のやうな心にその像を刻みつけることなんか何でもありやしない！ それもね、原因はと言へば女の腕さから出たものだ。私たちが悪いのぢやない、さういふ風に作られてゐるのが私たちなのだ。これが、どうなるであらう。御主人は切にあの方を思つてゐられる。又の不憫な化け

ものの私は同じやうに御主人を思つてゐる。ところがあの方は又、勘違ひをして私に惚れ込んでゐられるやうだ。男なのだから、このままの身の上では御主人の愛を斷念せなければならぬ。女なのだから、——お可哀想に、——オリヴィアさんはどんなにか役にも立たぬため息をつかれることであらう。ああ「時」よ！ お前がこの縛れを解くのだよ、私ぢやないよ。こりや私の手にあまる結び目だ、解けたものぢやないわ。

〔退場。〕

第三場　オリヴィアの館の一室。

サア、トウビー・ベルチとサア、アンドルー登場。

サア、トウビー　さあ、來た、サア、アンドルー。夜中過ぎて床に入つてゐない

のは早起をしてゐることだ。して、ディレウロ dileuro surgere スルゲレ「黎明の起床は」だ。知つてゐるだらう。「註。Dileuro surgere saluberrimum est.」黎明の起床は健康に資する。」といふ文章の半分を引用したのである。この文章は當時の文法學校で使つてゐたリリーの『ラテン文法』に出てゐる。」

サア、アンドルー いや、知らないよ。でも、おそく起きてゐるのはおそく起きてることだつてことは知つてゐる。

サア、トウビー 結論が間違つてゐるよ。そんなのは酒の入つてゐない壺見たいなもので、己は嫌ひだね。夜中過ぎに起きてゐて、それから床に就くのは早からうぢやないか。だから夜中過ぎて床に就くのは夙つとに床に就くのだ。人生は四大「註。土水火風。」より成立つちやゐないかい。

サア、アンドルー さうは言ふやうだがね。己は飲食のめくひで成立つてゐると思ふんだ。

サア、トウビー 貴公は學者だ。だからさ、飲食のめくひをやらう。おうい、マリアン

〔註。マライアの別名。〕 徳利一本！

道化登場。

サア、アンドルー それ、そこへ阿呆が来たぞ。

道化 いや、お揃ひですな。『われら三人』の晝を御覽になつたことはありま

せんか。「註。二人の莫迦者、或は二頭の驢馬を描き、その下へ“we three”と書いた看板晝のとを言つたのである。無論見てゐるものを加へて三人になるとの意。」

サア、トウビー 驢馬公、よう来た。「前註参照。」さあ、引續ひきつづ唄をやらう。

サア、アンドルー ほんたうにこの阿呆はいい聲をもつてゐる。この阿呆のやうにうまいお辭儀と歌にもつて來いの、いい咽喉のどとが己のものになるなら、四十シリングは惜しくないね。どうして、お前、昨夜ゆうべはなかなかうまい莫迦もがを

やつたよ、そらビグログロミタスのことを言つた時にさ、ヴェイビアンズがキューバスの赤道を通つた話だよ。己はお前の情婦へ六ペンス遣つたつけ、さうぢやないか。

道化 零細纏頭、頂戴着服致しました、マルヴォリオの鼻は鞭の取手ぢやございませぬからね。私の戀人は白い手を有つてゐますよ、それに「マーミドン」「註。この道化が行きつけてゐた酒屋の名であらう。」は壘詰のエイルなんか出すやうな店ではないのです。

サア、アンドルー うまいものだな！ 最上の莫迦噺だ、要するに、これは。さあ、歌をやつてくれ。

サア、トウビー さあ、やれ。そらお駄賃の六ペンスだ。歌を聞かせて貰はう。

サア、アンドルー そら、己からもテストリル「註。凡そ六ペンスの貨幣。」だ。苟も、一人の士爵が六ペンスを――

道化 戀歌がよろしいか、欣快歌といつたやうなものに致しませうか。

サア、トウビー 戀歌だ、戀歌だ。

サア、アンドルー さうとも、さうとも、訓誡なんざ面白くもないよ。

道化 「歌ふ」

ああ、わが君よ、いづかたにさすらひ給ふ。

ああ、待てしはし。高低に、歌は自在の

戀人こそは來るなれ。

この上は行かせ給ふな、らうたき人よ、

旅路の果は戀人の逢瀬にありと、

あらゆるさとき人もこそ知れ。

サア、アンドルー こりや素破しくうまいものだ。

サア、トウビー うまい、うまい。

道化「歌ふ」

戀は何ぞや。後の世のことにはあらず。

今、よろこびはまのあたりに笑ひ興ぜり。

未来はいつもさだめなし。

たゆたへば豊の實りは失はれなむ。

さらば、いざ、くちづけむ、花の少女子、

花染衣、やがて腿せなむ。

サア、アンドルー 斷然、甘美流麗な聲だ。

サア、トウビー 感染的「感傷的」な咽喉だ。

サア、アンドルー 頗る甘美で、かつ、傳染的だ。

サア、トウビー 鼻で聴けば傳染が優婉だ。どうだ、一つ天空を躍らせてくれようか。一人の織子から三つの魂を抜き出すやうな引續唄で夜の鼻の目を覺ま

してやらうか。どうだ、やるか。

サア、アンドルー やるどころぢやない。己や引續は得手だ。

道化 そりやもう猿「得手」にも瘞撃つる「引續ぐ」やつがありますよ。

サア、アンドルー その通り。引續は『この野郎』にしよう。

道化『頬桁たたくな、この野郎、』あれですかい、士爵。すると、どうしても

あなたに野郎と言はなければなりませんね。

サア、アンドルー 人に野郎と言はせるのはこれが始めてぢやないんだ。始める、

阿呆、『頬桁たたくな』で始めるんだ。

道化 頬桁をたたかなければ始めることは出来ませんや。

サア、アンドルー うまい、上出来だ。さあ、やれ。〔三人引續唄をうたふ。〕

マライア登場。

第二幕 第三場

マライア　まあ、何といふどんちゃん騒ぎをやつてゐるのだらうねえ！　お姫さまが家令のマルヴォリオを呼び出して、あなた方を追拂へと仰有らなければお目にかかりませんよ。

サア、トウビー　お姫さまはちやんころだ。こちらは幕僚だ。マルヴォリオは間拔けた。そこで『三人、めでたいわれら』だ。己は近親ぢやないか。血縁の仲ぢやないか。へなちよこ姫さん。お館さん！

「昔、バビロンに一人の男、姫さんえ、姫さんえ！」

道化　こりやどうしてこの士爵は莫迦噺がとてもお上手だ。

サア、アンドルー　さうさ、やる氣になればなかなかうまくやるよ、己だつて同じことだ。この男は己よりや手際よくやるが、己はずば抜けたのをやる。

サア、トウビー　「さても、師走の十二日——」
マライア　後生だからさ、静かになさい！

マルヴォリオ登場。

マルヴォリオ　皆さん、氣でも狂つたのですか。一體どうしたのです。こんな夜更けに鑄掛屋見たいにわけの分らない聲を張り上げないだけの正氣と行儀と禮儀はあまりにならないのですか。このお館を居酒屋にしてお了ひになるのですか、遠慮會釋もなく靴直しの歌ふ引續唄などを號き立てるなどは。あなた方には場所や人柄や時刻に對する斟酌なんてものはないのですか。

サア、トウビー　地獄に斟酌するやつがあるかい。早く往つてごねろ。

マルヴォリオ　サアトウビー、私はあなたに直言しなければなりません。お姫さまは斯う言つてくれと仰有いました、即ち、近親としてお世話申し上げてゐるが、あなたの亂行には何の由縁もない筈だ。あなたが不品行と絶縁せられるなら、よろこんでお宿を致します。さもなければお立ち退きを願ひたい、

快くお別れ致します、との事です。

サア、トウビー 「さらばわが妹子、往かねばならぬ。」

マライア およしなさいよ、サア、トウビー。

道化 「目には末期の色こそ見ゆれ。」

マルヴオリオ こんなになつてゐるのか。

サア、トウビー 「されど決して死にはせぬ。」

道化 それぢや死んだも同じだ。

マルヴオリオ いやはや、御名譽なことだ。

サア、トウビー 「言つてやらうか、出て行けと。」

道化 「言つたところで何になる？」

サア、トウビー 「言つてやらうか、出て行けと、情容赦もあらばこそ。」

道化 「ああ！ いや、いや、いや、いや、お前にやとても出来まいよ。」

サア、トウビー 調子が狂つてるぞ、おい！ 嘘を吐け。「マルヴオリオに」何で

え、手前は、たかが家令ぢやねえか。手前が品行方正だからつて菓子とエイ

ルが無くなるでも思つてゐやがるのか。「註。"cakes and ale" は祭日と聖人日の附

きものであるところから、清教徒が排斥した「酒もり」の通稱となつた。」

道化 さうとも、聖女アンが御承知だい。薑で口中をひりひりさせるんだ。

「註。聖女アンは聖母の母。靈肉の歡樂を司る。薑は色情を激發すると考へられてゐた。」

サア、トウビー 違えねえ！ おい、出て行け、パンの破片で家令の鎖でも磨れ。

徳利一本だ！ マライア

マルヴオリオ メアリスさん、お前、假にもお姫さまの御氣色を輕んずるつもりで

なければ、こんな不作法な眞似をさせるやうなものを當てがはないがいいよ。

この手に誓つて言ひつけてやるから。

「退場。」

マライア 行つてお耳を振るがいいよ。「註。道化の被つた頭巾には驢馬の耳が附いてゐた。」

サア、アンドルー あいつに果し状を送つてさ、そいつをすつぽかして、さんざん莫迦を見せてやる、これなんざ、空腹すくはらにぐいとひつかける位氣もちのいいものだらうな。

サア、トウビー 行き給へ、士爵ナイト。己が果し状を書いてやる。何なら口頭で貴公の憤慨を傳へてやつてもいい。

マライア まあ、まあ、サア、トウビー、今晚のところは御辛抱をなさりませ。あの公爵からの若い者が今日お逢ひしてからといふもの、どうもお姫さまのお心もちが落着かれないのです。ムシウ・マルヴォリオのことは私一人にお任せなさい。あれをうまく瞞して莫迦の合言葉にしてやり、世間のお笑ひ草にしなかつたら、寢床で手足を伸ばすだけの知慧でも有つてゐると思つて下さいますな。これには自信があるのですから。

サア、トウビー 教へろ、教へろ。あいつのことを少し教へてくれ。

マライア 斯うなの、あの人はどうかすると一種の清教徒ピュリタンなのよ。

サア、アンドルー うぬ！ それと知つてゐたら、犬のやうに殴ぶしつけてやるのだつた。

サア、トウビー 清教徒だからかい。これ、士爵ナイト、貴公の剋切な理由は？

サア、アンドルー 己は剋切な理由なんか持ち合はせないよ、だが、結構間に合ふだけの理由をもつてゐる。

マライア 清教徒ピュリタンだつて、何だつて、あいつには極まつた考なんかありやしな
いんだよ、唯その場その場の御都合主義なのよ。變に氣取つた頓痴氣うぬぼれなんだわ、お大層な言葉を暗記してゐて、無暗にそれを振り廻はす。己惚うぬぼれの強い奴つたらありやしない。自分ではいいとこだらけで埋まつてゐるやうに思ふものだから、自分を見る者は皆心を寄せてゐるといふのが自信の根據もとなの。その弱味をねらつて、私がこれから目覺ましい仕返しをしてやらうといふのよ。

サア、トウビーで、どうしようつてんだ？

マライア あいつの通る路へえたいの知れぬ手紙を落して置きます。その中には髻の色や、脚の形や、歩き方や、目つき、額つき、顔色などで、自分の姿がまざとまざと描かれてゐると気がつくやうになつてゐます。私は姪御さん、私の御主人にそつくりの手で書くことが出来ます。忘れて了つたものなどでは二人の手跡を見分つことが出来ない位です。

サア、トウビー うまいぞ！ 魂膽を嗅ぎつけた。

サア、アンドルー 己にも臭つて来た。

サア、トウビー お前の落すその手紙に依つて、それが姪から来たものだ、姪があいつを思つてゐるのだと、考へるつてんだ。

マライア まあ、そこいらに目をつけたのよ。

サア、トウビー 目で鼻をあかすといふわけだな？

マライア はな「端」から極つたことよ。

サア、アンドルー ああ！ そいつはおもしろからうぜ。

マライア 素破らしいお慰みです、こりや請合ひますよ。薬の効目はちやんと分つてゐるのです。あいつが手紙を見つけた處へちやんとお二人の場所を極めてさし上げますからね、そこへ道化が第三席を承ることに致しませう。それをあいつがどういふ風に解釋するか、よく御覧になるのですよ。今夜は、まあ、お寝みになつて、これから先のことを夢にでも御覧なさい。さやうなら。

〔退場。〕

サア、トウビー お寝み、ペンテジリア。「註。アマゾン族の女王。これも小女のマライアに

對する冗談であるが、同時に讚嘆の意を含ませたものであらう。」

サア、アンドルー なかなか、いい女だ。

サア、トウビー 純血種のビーグル「註。小さな獵犬。」だよ、而も己に參つてゐん

だ。え、おい、どうだい？

サア、アンドルー 先には己にも参つてた。

サア、トウビー さあ、寝ようよ、士爵。貴公はどうしても、もつと金を取寄せなければならぬ。

サア、アンドルー 若し貴公の姪御を物にすることが出来なけりや飛んだ見當違をやるわけだ。

サア、トウビー 金を取寄せると、士爵。結局あいつを手に入れることにならなければ莫迦とでも言へ。

サア、アンドルー そりや言はなきや承知しないよ、貴公が何ととらうと構やしない。

サア、トウビー さあ、来い。スペイン酒の爛でもしよう。今となつちや遅過ぎら。さあ、来い、士爵、さあ、士爵。

〔退場。〕

第四場 公爵邸の一室。

公爵、ヴァイオラ、キューリオ、その他登場。

公爵 何か音楽をやつてくれ。やあ、お早う、皆さん。やあ、シザリオ、だが、あの一曲の歌、昨夜聞いたあの古い、時代めいた歌だがな。あれは軽快な歌曲や無暗に潑刺とした、目眩しい調子のももの、氣取つた言葉遣よりも、よほど己の思をなだめてくれたやうに思はれた。さあ、やれ。一聯だけでもいい。

キューリオ 御意でございますが、あれを歌へる者がここにゐませんので。

公爵 誰だい、それは？

キューリオ 道化のフェストでございます。レイディ・オリヴィアの父君が殊

の外御寵愛になつた阿呆でございます。お邸の何處かに參つて居ります。

公爵 捜して来るがよい、その間、音楽をやつてくれ。「キューリオ退場。音楽。

ここへ來い、少年。この後お前が戀をするやうなことがあつたら、その嬉しい痛手の中で私を思ひ出してくれ。何故なら、すべてまことの戀人といふものは私見たいなもので、戀せられてゐる人の變らぬおもかげを思ふ外のすべての思ひごとでは何事にも落着かず、氣が移り易い。この曲はどうだい？

ヴァイオラ 戀の神の占め給ふ玉座からの木魂とも聞かれます。

公爵 うまいことを言ふ。こりやてつきり、若くはあるが、お前の眼はいとし
いと思ふ何物かの上に注がれたことがあるに相違ない、さうではないか。

ヴァイオラ 少しはさういふこともございます。

公爵 どんな風の女だ？

ヴァイオラ あなたさまのやうな顔つきで。

公爵 ぢや、お前が戀をする程の者ぢやないな。で、年は幾歳だい？

ヴァイオラ あなたさまのお年頃でございます。

公爵 年をとり過ぎてるよ。女にはいつも自分よりも年上の者を選ばせるのだ、さうすれば男にしつくりと合ふやうにするし、うまく釣合のとれた愛情で夫の心を動かす。といふのはね、どんなにわれわれが自分を賞めるにせよ、男ごころといふものは女のころよりも變り易く、移り易く、夢中になることも多い代りに落着きもない、すぐに使ひ古され、失はれて了ふものだ。

ヴァイオラ 殿さま、私もその通りだと思ひます。

公爵 だから戀人はもつと若いのにするのだな。でない、愛情が持ちこたへないよ。女は薔薇のやうなもので、その美しい花は一度咲くと、もうその時に落ちるのだから。

ヴァイオラ まことにその通りでございます。ああ、それはその通りでございます

ます。完全なものとなつたその時に死ぬるのでございます。

キューリオと道化再び登場。

公爵 おい、その男！ さあ、昨夜聞かせて貰つたあの歌だ。よく聴くのだよ、シザリオ。これは古い、素朴なものだ。日向ぼつこりをしてゐる糸繰り女や、編みものをする女や、骨の糸巻を轉がして機を織る罪のない娘どもがよく歌つてゐる。単純な眞を歌つたもので、老人のやうに、清い戀路のあとを思ひ忍んでゐる。

道化 よろしうございますか。

公爵 いいよ、さあ歌つてくれ。

道化 「歌ふ」

〔音楽。〕

來れかし、來れかし、死よ、いざ來れ、

うれはしき杉のさなかに横へよ、

去ねよかし、去ねよかし、息よ、去ねかし、

うるはしき情なき人ぞわれを殺せる。

水松の葉さし貫きし白經巾を

ああ、ととのへよ！

わが如きまごころをもて死ぬるもの

また世にあらじ。

花ひとつ、色香妙なる花ひとつ、

わが黒き柩の上に撒くなかれ。

友ひとり、友ひとりだに迎へざれ、

わが骨を投ぐるところに、われの死骸を。

千よろづの歎^{なげ}歎^{なげ}り泣く音を除くためには

ああ、よこたへよ!

戀人の、そこに泣くべく、^お墓を

見ざるところに。

公爵 御苦勞だつた、これは御駄賃。

道化 苦勞は致しませんよ、歌ふのは楽しみでございます。

公爵 ぢや、楽しみ料を出さうよ。

道化 なるほど、樂は苦の種、楽しみにもいつか應報〔報酬〕がまゐります。

公爵 さあ、暇をとらず、一先づ下つて貰はう。

道化 では、憂鬱神の御加護を祈り、仕立屋が色交ぜの絹であなたさまの胴着を作るやうにと、念じ上げます、と申すのは、まことにオパール色のお心で見せられますからで。斯ういふ風に氣の變り易いお方は海へお出かけにな

るといいのだ、あらゆるものに心を動かし、行手はいづこさだめなく、といつたやうなわけでしてな。おもしろい船旅と申しますと先づ空を掴んだやうなものでございますから。はい、おさらば。

〔退場。〕

公爵 他の者は皆遠慮してくれ。

〔キューリオと從者たち退場。〕

もう一度な、シザリオ、例の残忍な女君のところへ行つて來い。世界よりも貴いわが戀はむさくろしい土地の大ききなどには目もくれないのだ、と言つてくれ。幸運があつた女に與へた財産などは幸運と同じやうに頼にならないものだと思つてゐると言つてくれ。たゞ自然があつた女を飾つてゐる奇蹟と、珠玉の中の女王ともいふべきものが己の魂を惹きつけてゐるのだ、とな。

ヴァイオラ でも、あなたさまを愛することは出來ないと仰有いましたら?

公爵 そんな返事はさせないよ。

ヴァイオラ でも、それは仕方がございますまい。例へば、ある婦人、多分さう

いふ婦人はございませうが、その方があなたさまがオリヴィアさまを思はれる切なる戀と同じやうな思を傾けてあなたさまの愛を求めてゐると致します。あなたさまはその方を愛することが出来ない。その方はさう仰有います。その方はそれでお返事を頂いたことにはならないでせうか。

公爵 女の脾胃は戀が私の心に起すやうな強い情熱の鼓動に耐へることが出来ない。女の心臓はこれほど大きなものではなく、これほど多くのものを容れることが出来ない。持ちこたへるだけの力がないのだ。情ないことだが、彼等の戀は食慾と言つて然るべきものだ、村肝の心を碎くそれではなくて、口蓋の慾、堪能し、飽満し、嫌氣を起すやうにもなる。ところが私の戀は全く海のやうで、飽くことを知らぬ、又、海のやうにいくらでも消化する。女に耐へ得るやうな戀と己がオリヴィアを思ふ戀とを比較してくれるな。

ヴァイオラ ではございませうが、私は存じて居ります——

公爵 何をお前は知つてゐるのだ？

ヴァイオラ 女が男に對してどのやうな戀をするかといふことを、いやが上にも存じて居ります。まことに、彼等は私どもと同じやうに眞實の心をもつた者でございます。私の父は一人の女をもつてゐました、が、それが男を思ひました、例へば、私が女でございましたら、御前さまを思ふだらうと思ふやうな風に思つたのでございます。

公爵 で、その物語はどうなつたか？

ヴァイオラ 白紙でございます。ついで自分の戀をうちあげたことがなく、一圖に忍ぶ戀わづらひが、蕾の中の蟲のやうに、ダマスク薔薇のやうなその頬を蝕むがままにさせてゐました。思のうちにやつれ果て、緑に、黄に、うつらふ憂愁の中で、石碑の上の「忍耐」の像のやうに、悲嘆を微笑ひながら、坐つてゐました。これこそまことの戀ではございせんか。私ども男といふ

者はもつといろいろなことを言つたり、誓を立てたりすることは出来ませうが、私どもの見せかけは思つてゐるよりも以上のものです、誓言は大袈裟でも情がないといふのが男の常ですから。

公爵 だが、その妹さんは戀ゆゑに死んだのかい。

ヴァイオラ

父の家では娘といつても、息子といつても、私だけです。でも、まだ

何とも分らないのだから。「註。これは旁白。セバステイアンのことを考へてゐるのである。」

御前、あの方のところへ参りませうか。

公爵 さう、さう、それが用事だつた。急いで行つてくれ。この寶石を渡して

くれ。私の戀は一步も譲らない、断りは聽かないと言ふのだ。「兩人退場。」

第五場 オリヴィアの庭園。

サア、トウビー・ベルチ、サア、アンドルー・エイギエチーク

及びフェイビアン登場。

サア、トウビー さあ、來給へ、シニョール・フェイビアン。

フェイビアン はい、はい、参りますよ、こんな面白いことをちよつぶりでも見

落すやうなら、憂鬱の水で釜釜にせられませう。

サア、トウビー あの吝嗇な、業突張の、羊脅しの咬み犬見たいな奴がひどい赤

恥をかくのは嬉しいぢやないか。

フェイビアン 嬉しい段ぢやありませんよ、そら、あの熊いぢめの一件で私に嫉さ

まの御不興を蒙むらせたのもあいつだからね。「註。熊いぢめは棒杭につないだ熊に

犬をけしかけて遊ぶこの頃の遊興。雞の蹴合ひのやうなもので、當時清教徒がやかましく言つて攻撃した。」

サア、トウビー あいつを怒らせる爲なら又熊を持ち出さうよ、一つこつびどく莫迦にしてやらう、なあ、どうだい、サア、アンドルー。

サア、アンドルー やらなきや一生の恨だ。

マライア登場。

サア、トウビー いたづら者の小女郎が来たぞ。印度紫磨金、どうしたい。「註・

「印度紫磨金」'my metal of India' にはいろいろの解釋がある。ここには對手の意を迎へる爲、'pure gold of India' の意味を述べたものと解釋する。」

マライア あなた方三人は黄楊の木の中へお入りなさい。マルヴォリオがこの徑をやつて來ます。半時ばかり、このむかふの日向の中で、自分の影に向つてお辭儀のお稽古をしてゐましたのよ。見ていらつしやい、おもしろい事が

起るから。この手紙を見ると忽ち考へ込んだ間抜けになるつてことは請合ひます。お隠れなさい、さ、おかしいのだから。さあ、これはそこへ置く、と。

〔手紙を投げる。〕

ここへ鱒が來ますよ、そいつは擲つてとらなきやならないのです。「退場。」

マルヴォリオ登場。

マルヴォリオ 唯、運だ。何事も唯、運だ。いつかもマライアがあの方^{かた}は己を愛してゐられると言つてゐた。己も亦斯ういふ際^{ばい}どいことを言はれるのを聞いた、といふのは、あの方^{かた}が心を動かすやうな者があれば、それは己のやうな氣性の者であらう、と仰有るのだ。それにお仕^{つか}へしてゐる者の中では誰よりも己を大切にされてゐられる。こいつを何と考へたものだらう。

サア、トウビー　こりや己惚れ切つた大莫迦野郎だ！

フェイビアン　ま、黙つて！　沈思黙考で稀代の七面鳥になつてゐやがる。鳥冠くまかをおつ立てて、踏反ふんせり返つたところはどうか！

サア、アルドルー　畜生、毆ぶしつけてくれるぞ！

サア、トウビー　黙つてろ！　といふのに。

マルヴォリオ　マルヴォリオ伯になるか！

サア、トウビー　この野郎！

サア、アンドルー　ピストルをぶつ放せ、ピストルを。

マルヴォリオ　さういふ例はあるな。レイデイ・ストレイチーは式部職の者と結婚せられた。「註。バンドルロの小説に依つて傳へられ、ジョン・ウエプスターの悲劇『モール

ファイ伯爵夫人』*Duchess of Malf*の素材になつた物語の中のアマルファイ伯爵夫人は、未亡人になつてから家令と結婚した。モートン・ルースはこの場合の‘Lady Strachy’は‘Lady Malphey’が誤

つて傳へられたものであらうと言つてゐる。ジョン・コリヤアとドウヴァ・ウィルソンの言ふやうに、

‘Strozzi’の轉訛であるとすれば、「ストラッチー」と讀むべきであらう。」

サア、アンドルー　何を吐かす、ゼゼベルめ。「註。ゼゼベルは圖圖しさの典型、但し、舊

約聖書に出て来る女であるが、それを男に用ゐたところにサア、アンドルーの學問が窺はれる。」

フェイビアン　まあさ、黙つていらつしやい。たうとう、はまり込こままつた。

妄想に引張り廻はされるところを見ていらつしやい。

マルヴォリオ　結婚の後三個月、やをら高座かうざに腰を下し——

サア、トウビー　ああ、石弩いしゆみがあつたら、あん畜生の眼を射つぶしてやるんだ。

マルヴォリオ　枝葉えだは模様もようの刺繡ぬいこのある天鵞絨てんじやうじやうを着て、役人どもを身のまはりに呼び寄せる、と。己は晝寢の長椅子から出て來たところで、そこにはまだ眠つ

たままのオリヴィアを残して來たのだ——

サア、トウビー　やあ、怪しからんぞ！

フェイビアン ああ、黙つて！ 黙つて！

マルヴォリオ さて、それから貴人の感懐に耽るんだ。嚴然とぐるりを見廻はした上で、^{たが}方にも御自身の身分が分つてゐられることを望むと同様に私にも自分の身分が分つてゐる、と言つて、さて身内の者、サア、トウビーをこれへ――

サア、トウビー 畜生、牢へぶち込むぞ！

フェイビアン ああ、黙つて、黙つて！ まあ、まあ。

マルヴォリオ 家の者七人は、はつと答へて、あいつを探しに出かける。その間、己はむつかしい顔をしてゐる。まあ、懐中時計の螺旋ねぢを巻くか、それともこの「註。「家令の鎖を」と言ひかけて、」――いや、何か貴重な寶石でもいぢくつてゐる。トウビーがやつて来る。そこで、己にむかつてお辭儀をする――

サア、トウビー こいつを生かして置いたものだらうか。

フェイビアン こちらの沈黙が荷車にかけて引裂かれようとも、このところは

黙つていらつしやい。「註。ヴェルギリウスの『アイネイス』第八巻に、メットゥス、フフェ

ッテイウスといふ者が反對の方向へ走る戦車にかけて引裂かれたとある。」

マルヴォリオ 己は斯ういふ風に手をさし伸ばし、いつもの微笑を無理におし鎮めて、^{おこ}嚴かな顔をしてゐる。

サア、トウビー すると、トウビーが貴様の唇をふん撲たたりはしないか。

マルヴォリオ 斯う言ふのだ、「トウビーさん、妙な縁で姪御の夫になつたからには、遠慮なく申上げるのだが、」――

サア、トウビー な、何だ、何だと？

マルヴォリオ 「泥酔を改めて頂かなければならぬ。」

サア、トウビー 糞喰へ、こん畜生！

フェイビアン まあ、ちつとして、でない、筋書がおぢやんになります。

マルヴォリオ 「それにあなたは時といふ寶を或愚かな士爵と共に空費してゐられる。」

サア、アンドルー あれは已だよ、きつと。

マルヴォリオ 「サア、アンドルーなる者」――

サア、アンドルー 言はないことぢやない、よく己のことを愚かだと言ふのだ。

マルヴォリオ 「手紙を見て」こりや何事が起つたのだ。

フエイビアン さあ山鵲（註。莫迦者。）が絹（註。）に寄つて來たぞ。

サア、トウビー ああ、黙つて！ どうか、あいつが聲に出して讀むやうに魔が

誘ふといいのだが――

マルヴォリオ 「手紙をとり上げて」おや、これはお姫さまの手だ！ これはてつ

さりあの方（註。）のCだ、あの方（註。）のUだ、又あの方（註。）のTだ。又、斯ういふ風にあの

方（註。）は大文字のPをお書きになる。こりやまぎれもない、あの方（註。）の手だ。

サア、アンドルー あの方（註。）のCだ、あの方（註。）のUだ、あの方（註。）のTだ。それがどうした？

マルヴォリオ 「知られざる戀しき人に幸多かれとこの文（註。）をまゐらす。」

そつくりあの方（註。）の言葉遣ひだ！ 封蠟さん、御免を蒙るよ。待て！ 印形の

意匠も、いつも封を緘（註。）ちるに用ゐてゐられるルークリース（註。ローマの貞女、

ここではこの肖像を意匠にしたもの。）だ。こりやお姫さまだ。一體誰に宛てたもの

であらう？

フエイビアン 奴（註。）、これで參つちまふんだ、首つたけになるんだ。

マルヴォリオ 「讀む」

「わが戀をジョウヴぞ知れる。

誰ぞ、その人は？

唇よ、ゆめな動きそ、

第二幕 第五場

人に知らすな。」

「人に知らすな。」その次は？ 調子が變つてゐるな。「人に知らすな。」おい、

マルヴォリオ、お前だつたらどうする？

サア、トウビー 莫迦、くたばれ！

マルヴォリオ 「讀む」

「わが戀ふる者を使ふは意のままなり。」

無言はルークリスの刃の如く、

血ぬらず、撃ちて、この胸を貫ぬけり。

M・O・A・I・わが命を治らす。」

フェイビアン 莫迦莫迦しい謎だ！

サア、トウビー 女郎、やりをつたな！

マルヴォリオ 「M・O・A・I・わが命を治らす。」いや、先づ第一行だ、かうつと、

かうつと、かうつと。

フェイビアン ひどい毒の皿を料理したものだ！

サア、トウビー すると、鶯の奴め、すーつとそいつを拵つたものだ！

マルヴォリオ 「わが戀ふる者を使ふは意のままなり。」そりやさうさ、己を使ふことは意のままだ。己はお仕へしてゐる。あの方は御主人だ。こんな事はあたりまへの分別のある者にも分る。これには別に難解なものがない。ところで最後の行だ——このアルファベットの排べ方はどういふ意味をもつたものだらう？ 己の中にある何物かに似たものとする事が出来るかいいのだが、

——待てよ！ M・O・A・I・と——

サア、トウビー おう「O」さ！ あい「I」よ、だ。そいつを釋いて見る。そろそろ鼻が利かなくなつて來たかな。

フェイビアン へまな獵犬は斯うなると愈、吠え出します。狐のやうにぶんぶん

臭つてゐても分らないのですよ。

マルヴォリオ M、マルヴォリオ。M、何だ、己の名はそれで始まつてるんだ。

フェイビアン 今に勘づくと言はないことですか。野良犬は嗅ぎ違ひがうまいのでね。

マルヴォリオ Mと、——だが、續き工合が合つてゐない。そこで調査が通らな
いことになるのだ。Aが来る筈なのにOが来てゐる。

フェイビアン それから、「おう「O」悲しや」で終るといいのだがね。

サア、トウビー さうさ、それとも棒を喰はせて、こいつに「おう「O」痛い」と
叫ばせるか。

マルヴォリオ それにIが後に来てゐる。

フェイビアン あい「I」、その通り。後に相控へた目があれば、前に幸運を見る
よりも、踵に附いて来る面汚しの方を見ることが出来たであらう。

イルヴォリオ M・O・A・I。このもちりは前のやうに易しくない。だが、少少
無理をすれば己に順應しないものでもない。この文字は皆己の名の中にある
のだから。待てよ！ここに散文が附いてゐるぞ。

〔讀む〕

「この文おん手に入らば、おもひ廻らし給へ。宿世の星を言へば、われ君
の上にある。高貴をな恐れ給ひそ。或人は高貴に生れ、或人は高貴を成就し、
又或人は強いて高貴とせらる。君の命運は手を開けり。勇氣と精魂を傾け
て迎へ給へ。この後恐らくその人となり給ふべき者の境遇に慣れ給ふやう、
賤しき脱皮をうちすてて爽やかなる者となり給へ。身内の者と抗ひ給へ。
僕婢には氣むづかしく給へ。言葉にはおごそかなる談理を響かせ給へ。
あやしく氣まぐれなる癖好みをよそほひ給へ。かく君に勸むる者は君を慕
へるになむ。君が黄色の靴下を賞め、交差の靴下止めを見むと願ひし者を

想ひ起してよ。いでや、願ひ給ふとならば君が身は定まれり。願ひ給はずば、いつまでも家令、僕のひとり、幸運の指に觸るる値なき者として君を見むかな。あなかしこ。君とかしづきのわざを代へむと願へる

「幸多き幸なの子より。」

晝のあかりと廣野でも、これより明らかに示してはくれまい。こりや瞭然たるものだ。傲慢にならう、政治上の論著を讀まう、サア、トウビーに面喰はせてやらう、卑しい知合仲間から足を洗はう、何から何までびつたりとここにある通りの者にならう。己は空想になぶられて自分を莫迦にしてゐるのではないぞ、どこから考へてもお姫さまは己を思つてゐられるのだ、と斯う考へずにはゐられぬ。つい近頃、己の黄色の靴下をお賞めになつた、交差の靴下止めをつけてゐる己の脚がいいと言はれた。これで見ると、己の愛を求めて御自身の心をうち開けてらゐられる、で、一種の命令で以てあのお好きな装

をするやうにと、おせがみになるのだ。己が幸福な身の上になつたことに對しては宿命の星に感謝する。ぐつと威張つてやらう、ふん返り返つて歩いてやらう、出来るだけ早く、黄色の靴下を穿いてあの交差の靴下止めをつけて。ジョウヅと星にお禮を申上げるよ。おや、まだ追仲があるぞ。

「讀む」

「わが誰なるを知り給はではあらじ。わが戀を容れ給ふとならば、君が微笑に心を通はせ給へ。かくて、わが前に來給ひし時には、いとしき人よ、つねに微笑み給へかし。」

ジョウヅよ、お禮を申す。微笑はうとも、そなたの望むことなら、何でもするよ。

「退場。」

フエイビアン　こりやおもしろい、ソフィー「註。ベルシヤ王の總稱。」から何千兩の年金をくれると言つてもわしの役割は賣りませんよ——

サア、トウビー この筋書きに免じてあの女の配偶つれあひになつてやつてもいいや。
サア、アンドルー 己だつてさうだ。
サア、トウビー 斯ういふ戯事わづらひをもう一つ持つてくりや持參金は要らん。
サア、アンドルー 己も要らんよ。
フェイビアン そこへ天晴あつはれな莫迦おとしが來ました。

マライア登場。

サア、トウビー あい、己の頸くびを踏みにぢらせてやらうか。
サア、アンドルー 己のでもいいよ。
サア、トウビー 三點ころがし註。Tray-trip は一種の賭博。骰子で三を出したのが勝になる
とネヤアズは言つてゐる。」で文無しになるやうに、獨り者の自由を棒に振つてお

前の奴隸になるか。

サア、アンドルー 本當に、己でもなるよ。
サア、トウビー いやもう、お前はあいつに途方もない夢を見させをつた、まぼろしが消えたら、奴さんやつこ、氣狂まぢがひになるぜ、あい。
マライア まあさ、本當のことを言つて下さいよ。うまく行きましたか。
サア、トウビー 行つたの何のつて、産婆に焼酎だ。「註。産婆に焼酎は附きものであるらしい。ジュリエットの乳母は二度まで焼酎を求める。」
マライア それで、この戯事わづらひの結末を御覽になりたいなら、あいつがお姫さまに見參するところを見て御覽なさい。黄色い靴下を穿はいてやつて來るでせう、ところがそれは身の毛も辣よだつほどにお嫌ひな色なのよ。それから、交差まじりあの靴下止めをして、それも蛇蝎へびとむしのやうに憎んでられる流行なのよ。それから、そなたにた笑ふでせう、ところが、ああして憂愁うれしに沈んでられるのですから、そ

れがまた今の御機嫌には全く適かなはない、で、きつとひどいおさげすみを受け
て追拂おとはれることになりますよ。御覽ごらんになりたいなら、従したがいていらつしやい。

サア、トウビー 奈落の門へ行くのかい、この途みち徹ともない剛巧ごうこうな鬼おにの奴やつめ。

サア、アンドルー 己も仲間入をしよう。

〔一同退場。〕

第三幕

第一場 オリヴェアの庭園。

ヴァイオラと鼓をもつた道化登場。

ヴァイオラ 御機嫌よう、お前さんもその樂器がくきもね。樂器がくきによつて暮らしてゐるのですか。

道化 いや、お寺によつて暮らしてゐます。

ヴァイオラ お寺さまですか。

道化 そんなものぢやありません。私やお寺によつて暮らしてゐるのです。住

んでゐるのは家の中で、私の家はお寺の側にあるのです。

ヴァイオラ なるほどね、王さまは乞食に居る。「情婦」と言ふことが出来る、乞食がお側にゐるなら。お寺はお前さんの鼓で立つ。「註。維持せられる。」ことが出来る、包み「註。鼓。」かくした仔細があるなら。

道化 仰有いましたね。いやもうこの節の手合には驚きますよ。頓智の利くものは警句一つが積たかの手袋です。瞬くうちに裏をひつくり返して表おもてにして見せることが出来るのですからね。

ヴァイオラ 確かにさうだよ。巧者に言葉をなぶりものにする手合はやがてえたいの知れないものにするのだから。

道化 だから私の妹には名前が無い方がいいと思ひます。

ヴァイオラ そりや又何故だい。

道化 だつてさ、名は言葉でせう。その言葉をなぶりものにするると、妹がえた

いの知れないものになります。だが、禁令でとつちめられてからつてものは大體言葉つてやつが全く仕方のない者になりましたよ。

ヴァイオラ これさ、その譯わけは？

道化 譯わけを言へたつて、あなた、言葉がなけりや言へませんよ。ところが言葉つてやつが、とても嘔吐おうときになつたので、私やそんなもので譯わけを言ふのがいやなんです。

ヴァイオラ お前さんはきつと吞氣坊主で、何物にも構ははない方はうだらう。

道化 さうぢやありません、或物には構はひますよ。だが、本心ではあなたに構はひませんね。それが何物にも構ははないことだと仰有るなら、それで以てあなたが雲隠れになればいいと思ひます。「註。するとあなたは何物でもなくなるわけですから、との意。」

ヴァイオラ お前さんはレイディ・オリヴィアの道化かい。

道化 どう致しまして。レイデイ・オリヴィアにたわけ〔註。道化。不品行。〕などはありません。結婚せられるまではたわけを家に置かないおつもりです。たわけが夫に似てゐるのは鯨（せい）が鯨（せい）に似てゐるやうなものです。本當に私はあの方（かた）のたわけではないので、唯、言葉を滅茶苦茶にする方（はち）の者です。

ヴァイオラ このあひだオーシーノウ伯のお邸（やしき）でお見うけしたつね。

道化 たわけは、あなた、太陽のやうに地球のぐるりを歩き廻ります。あらゆる處に輝きます。たわけが私の主人の處と同じやうにあなたの御主人の處に行くのでなけりやお氣の毒なことですよ。あすここでお伶俐なあなたさまをお見うけしたやうですね。

ヴァイオラ これ、私につつかかつて来るのならもう對手にはならないよ。待ち給へ、これはお駄賃だ。

道化 ぢや、ジョウウこの次（つぎ）、毛の御都合のよい時、あなたに髻を下さいます

やうに！

ヴァイオラ ほんたうに、白狀すると私は髻〔註。公爵の髻。〕にあこがれて殆んど病みついてゐるのだ、尤も自分の願（ねが）に生やさうといふのではないのだがね。

お姫（ひめ）さまはおうちかい。

道化 これを對（つがひ）にすると子を生まないでせうかねえ。

ヴァイオラ 生むだらうよ、納（しよ）つて置いて利殖をすると。

道化 私やフリジアの貴人バンダラスになりたいのですがねえ、このトロイラスにクレシダを連れて来て。〔註。トロイの王子トロイラスとギリシアの美女クレシダの戀

を取持つた者はバンダラスである。トロイラスとクレシダの物語はチョーサーの長詩以來當代の文學に屢、言及せられるものであり、シェイクスピアにもこの二人の戀を題材とする悲喜劇がある。〕

ヴァイオラ 分つたよ、物乞（ものこひ）がうまいね。

道化 こりや大したことはないと思ひます、と申すのは物乞（ものこひ）を物乞（ものこひ）したので

すから。クレシダは物乞ものこひでした。「註。トロイラスの戀を裏切つた後、クレシダは卒都婆小町のやうに落魄あちぢれ、物をになつて了つたと傳へられる。」お姫ひめさまはおうちですよ。どれ、行つてどちらからお出でになつたかといふことを説明してまゐりませう。あなたがどなたで、どういふ御用がおありになるかといふことは私の領域以外だ。「本性」と言つてもいいのだが、この言葉も古くなりましたよ。「退場。」

ヴァイオラ この男は阿呆を演やるだけの智慧をもつてゐる。また、そいつをうまくやるには一種の伶俐者であることが必要なのだ。からかつてゐる對手の心もちや人物の性質や時機を見てとらなければならぬし、又野生の鷹のやうに目の前に來た羽族とりはどんなものでも遁とさず、さらつて行かなければならない。こりや賢い人の手練てくと同じやうに骨の折れる仕事だ、この男が示す阿呆三昧は機宜を得てゐるのだから。伶俐者が莫迦まがになつたのは折角の智慧を臺なしにしてゐるのだ。

サア、トウビー・ベルチとサア、アンドルー登場。

サア、トウビー これは、これは、御機嫌よう。

ヴァイオラ 御機嫌よろしう。

サア、アンドルー Dieu vous garde, monsieur. 「註。御機嫌よう。」

ヴァイオラ Et vous aussi, votre serviteur. 「註。御同様に、貴殿の僕です。」

サア、アンドルー や、さうあつて頂きませう。「註。サア、アンドルーは「貴殿の僕です」「謹んで申し上げます」といふ挨拶の辭禮を文字通にとつたのである。」すりや、こちらも貴殿の僕だ。

サア、トウビー 館やうたへ向つて直往邁進せられますか。姪ひなは貴殿のお入りになるのを待つてゐます、御用向があれの方ほうにおありなのでしたら。

ヴァイオラ 姪御への航路です、と申すのはあの方が船果かたてどころだと申すの

で。

サア、トウビー 脚を試してごらんなさい。動かしてごらんない。

ヴァイオラ 脚を試せと仰有る意味をりかい。「理解」するよりも、以上に脚の方が私のつつかい。「支柱」になつてゐます。

サア、トウビー 私の言ふのは、さあ、お歩きなさい、お入りなさい、と申すので。

ヴァイオラ では、歩行と入門でお答へ致しませう。が、然し、先を越されました。

オリヴィアとマライア登場。

いとも秀れさせ給ふ高德の君、天よ、薫香の雨を降らせ給へ。

サア、アンドルー あの青年は立派な廷臣だ。「薫香の雨を降らせ給へ」か、なる

ほどな。

ヴァイオラ 用向はただあなたさまの聰明なお耳へ、お許を蒙つて申上げたく、さもなければ聲が出ないのでございます。

サア、アンドルー 「薫香」「聰明」「お許を蒙つて」。この三つは忘れないやうに書きとめて置かう。

オリヴィア 庭の戸を閉めておくれ。御用を伺ふ間、皆の者は遠慮するやうに。

〔サア、トウビー、サア、アンドルー及びマライア退場。〕

お手をお貸し下さいまし。

ヴァイオラ うやうやしく仰せを承ります。

オリヴィア お名前は何と仰有るの？

ヴァイオラ お姫さま、シザリオがあなたさまの僕の名前でございます。

オリヴィア 私の僕ですつて！ 妙に卑下して本當のことを言はないのが禮儀

と考へられるやうになつてからの世の中は味氣ないものになりましたわね。

お若い方、あなたはオーシーノウ公の僕ですよ。

ヴァイオラ　して、あの僕はあなたさまの僕。「註。當時戀人のことを「僕」と稱へた。」
あの僕の僕は所詮あなたさまの僕です。あなたさまの僕の僕はあなたさまの僕でございますよ、マダム。

オリヴィア　あの方のことなら、私や何とも思つてやしないよ、あの方の想つていらつしやることなら、私で一杯になつてゐられるよりも何も無しの白紙になつてゐられた方がいいと思ふわ。

ヴァイオラ　マダム、私は御前のために、あなたさまのあてやかな想を動かさうとして參つた者でございます。

オリヴィア　まあ！　お生憎さまだがね、二度とあの方のことを口にせられないうやうに願ひます。けれど、もう一人の方の方のとりなしをしようと思はせられ

るのなら、星の宿からの音楽を聴くよりもあなたの口説の方を聴きたいと思ひます。

ヴァイオラ　お姫さま――

オリヴィア　ちよいと御免遊ばせ。この前、ここで、あなたが私の心を迷はせてお了ひになつた後、指輪におあとを追はせました。ああいふことをして私は、私自身にも、私の僕にも、ことに依ると、あなたにも濟まないことをしたのではないかと思ひます。御自身のものではないといふことがお分りになつてゐる品を、恥しいたくらみで無理に押しつけやうとしたものだ、との嚴しい解釋を受けなければならぬのです。どう思召したか知ら。私の名譽を杭に縛りつけ、暴虐な心が考へ得る限りの口籠をかけない想を嚇けられたのではありませんか。「註。第二幕第五場（一二三頁）のフェイビアン言葉の中に出てゐる熊いちめに事よせた

隠喩である。この場合にはオリヴィアの名譽が熊に喩へられ、ヴァイオラの想が犬に喩へられてゐる。」

あなたのやうな物分りのよい方にはもう十分にうちあけてあります。私の心を隠してゐるのは胸ではなくて薄紗です。で、仰有ることを聞かせて下さい。

ヴァイオラ お氣の毒に存じます。

オリヴィア それは戀への一步です。

ヴァイオラ いえ、決してその一步にはなりません。度度敵を不憫に思ふことがあるのは世の慣ですから。

オリヴィア それぢやこの邊でよくよするのには止めませう。いやな世の中だ事！ 下下の者がともすれば大きな顔をしてさ！ とても餌食になる位なら狼よりも獅子の前に倒れた方がどんなにいいか分りやしない。「時計が鳴る。」時計が時間潰しを叱つてゐる。心配しなくてもいいのよ、お若い方、お前さんをどうしようといふのでもありませんよ。だがね、智慧と青春が收穫の季にもなれば、あなたの奥さまは立派な御亭主をお持ちになるでせうよ。そち

らがお前さんの道です、眞西です。

ヴァイオラ では「西行きよう！」だ。「註。「西行きよう！」、Westward Ho!」はテムズ

河の船乗りの言葉である。」御機嫌よろしう渡らせられますやうに！ 主人へのおことづけは、マダム、何もおありにならないのですね。

オリヴィア お待ち。

お前は私のことを何と思つてゐるのか。それを言つておくれ。

ヴァイオラ さうでないことをさうだと思つてゐらつしやる、と。

オリヴィア 私がさう思つてゐるとすればお前もさうだと思ふ。

〔註。この應答は微妙な取違へを示してゐる。ヴァイオラは、「オリヴィアが男を慕つてゐると思つてゐると思つてゐるが、實はさうでない(自分は女である)」と言つたのであり、オリヴィアは、ヴァイオラがあなたは自分は斯ういふ戀をする者だと思つてゐられるが、さうではない(それは自分を忘れたものだ)」と言つたと取り、「自分を忘れたと思つてゐるといふ點ではお前も同じことだ(お前はきつと自分のある者がさういふ變装をしてゐるのであらう)」と言つたのである。〕

ヴァイオラ、ちや、思つていらつしやる通りです。私はさうだと思つていらつしやるものではないのです。「註。オリヴィアの思つてゐるやうに男ではない、との意。」

オリヴィア　お前があつて貰ひたいと思ふお前であればよいと思ふ。

ヴァイオラ　それが、マダム、このありのままの私よりもよい者になりませうか。さうなればよいと思ひますが、今はあなたの機智、「愚痴」の的（まて）です。

オリヴィア　ああ、この人の唇の輕蔑（さげすみ）と憤怒（いかり）の中ではずるぶんの罵倒（ののしり）でも美しいものに見える！ 人殺しの罪でも隠されてゐたいと思ふ戀よりも早くは露（あら）はれない。戀の夜は眞晝だ。シザリオや、春の薔薇（ばら）に依り、處女（処女）の操（まじら）と、譽（ほまれ）と、眞（まこと）と、あらゆるものに依つて誓ひます、私はお前を戀してゐるのよ、それはどんなにお前が情（なさけ）なくしても智慧と道理では私の戀情（こゝろ）を隠すことは出来ない程の心もちなのよ。斯ういふ言葉を捉へて、口説（くは）くのは私の勝手、だからお前の知つたことではないといふやうな理窟（わけ）をつけてはいけない、それよ

りも、求めて得た戀も結構だが、求めずして與へられたのは尙更（さら）しいものだといふやうな理窟（わけ）でその理窟（わけ）を押しつぶしてね。

ヴァイオラ　純潔に依り、又私の若い命に依つて誓ひます、私には一つのころと一つの胸と一つのまことがあり、それはどの女（おんな）の方（かた）にさし上げたものでもありません。又、この後とも、この私ただひとりを除いてはそのころの持ち主（もじ）となることが出来ないのです。さやうなら、お姫（ひめ）さま、おさらばでございます。これ以上、主人の涙をかきくどくことは致（いた）しますまい。

オリヴィア　でも、また来て下さいね。お前なら。今はいやだと言つてゐる、その心を動かしてあの人の戀に惹かれるやうにすることが出来るかも知れないのだから。

〔兩人退場。〕

第二場

オリヴィアの館やかたの一室。

サア、トウビー・ベルチ、サア、アンドルー・エイギュチーク、及び

フェイビアン登場。

サア、アンドルー いや、断然、己は一刻も留まらん。

サア、トウビー 理由は、ぶりぶりやさん、理由は何だ。

フェイビアン 理由を仰有らなければなりませんよ、サア、アンドルー。

サア、アンドルー だつてさうぢやないか、貴公の姪御はこの己に與へられたよりも以上の寵遇をあの伯爵の僕しもべに與へてゐられる。己は庭の中で見たのだ。

サア、トウビー その間、姪は貴公の方を見てゐたのかい、おい。それを言つて

くれ。

サア、アンドルー 己が今貴公を見てゐる通り、はつきりと。

フェイビアン こりやあなたを思つてゐられるといふ大きな證據ですよ。

サア、アンドルー こやつ！ 己を莫迦にしをるか。

フェイビアン 判断力と道理の誓言に基いてそれが正常な論理であることを證明してごらんに入れます。

サア、トウビー その二人「註。判断力と道理。」はノアが船乗ふねのりになる前からの偉大なる倍審官であつたからな。

フェイビアン あなたの目の前であの青年に好意を示されたのは、あなたを發憤せしめ、あなたの眠り鼠のやうな武勇を覺まさせ、あなたの心に火を點つけ、あなたの肝臓に硫黄を焚たきつける爲ですよ。あの時、あなたはあの方なたの方へつかつかと進んで行つて挨拶をせらるべきでした。それから造幣局からの火

の煖味ぬくみを失つてゐない程、嶄新奇拔な戯言ごうごんで以てあの若者をずしんと一つやつつけて、物が言へないやうにせらるべきでした。斯ういふことがあなたの方ほうに豫期せられてゐた、それがおちやんになつて了つたのですよ。斯ういふ大丈夫二重塗の鍍金めっきといふ絶好の機會をむざむざと袖手傍觀で洗ひ落して了つたものだから、あなたは姫さまの御氣色の北地ほくちに船を走らせるやうなことになつたのです。さあ、さうなると、この際、武勇か政策で以て何とか賞讃に値するやうな企をせられることに依つて汚名を雪がれない限り、オランダ人の髻こむらの上の氷柱こむらのやうにぶら下つてゐなければなりません。

サア、アンドルー どちらか一つをとるとなれば武勇の方ほうをとる、政策は嫌ひだ。政治家になる位ならブラウニストになる。「註。一五八一年ロバート・ブラウンに依つて創設せられた清教徒の一派を Brownists と稱へる。後に獨立宗徒 (Independents) を稱へたもので、熱狂的な清教主義を守り、一般の社會から退けものにせられてゐた。」

サア、トウビー ちや、一つ、武勇を資本もとにして財産を作り上げるのだね。伯爵の若者に果し狀をたたきつけるのだね。あいつに十一個所の刀痕たうこんを刻みつけてやるのだ。姪はきつとそれを認めるだらう。それにさ、武勇の譽ぐらゐる女にとり入り易い戀の媒酌はないのだ。

フニイビアン この外に道はありません、サア、アンドルー。

サア、アンドルー 兩君の中どちらか果し狀を持つて行つて下さるか。

サア、トウビー やつつける、武張つた筆跡で書きなぐれ。峻烈簡明にやるんだ。とにかく雄辯で、獨創的でありさへすれば、どんなに深刻な皮肉を浴せかけても構はん。インクの自由を驅つて翻弄してやるがいい。貴公が貴公呼はりをする事三度位に及べば先づ間違はなからうよ。よしんば紙がイングランドはウエーアの町に聞ゆる寢臺の代りにもなる程の大きなものであるにせよ、「註。ライ・ハウスには今でもオウク材に見事な彫刻を施したその大きな寢臺が保存せられてある。十一呎

平方で高さ七呎半、優に十二人の人間を容れることが出来るといふ。」紙一枚に書き散らし得る限りの悪口雑言をばら撒くんだ。さあ、やつつける。インクの中にはうんと苦味を利かすんだ、貴公の書くのは鷺鳥（註。愚物の別名。）のペンであらうと、拔作であらうと、何だつて構ふものか。さあ、やつついたり。

サア、アンドルー 何處で貴公に會ふことにしようか。

サア、トウビー 例の cubiculo クブィクル「寢室」へこちらから出かけるよ。早く行け。

〔サア、アンドルー退場。〕

フエイビアン こりや大切な玩弄人形ですね、サア、トウビー。

サア、トウビー 己だつてお前、あいつにとつてはずいぶん高價いものについてゐるのだよ。二千兩以上にもなるかな。

フエイビアン きつと、おもしろい果し狀が出来ますぜ。でも、まさかお渡しになるのぢやないでせう？

サア、トウビー その時や二度とお目にかからないよ。あらゆる手段を盡してあの若者に返事をさせるんだ。牡牛に荷車の綱をつけてもあの二人を引きずり寄せることは難しいだらう。アンドルーの奴を開いて見ろ、あいつの肝臓の中には蚤の脚に凝りついてる程の血を見つけるのがせいぜいのところだ。解剖のお餘りがあるなら己が食べて了ふ。

フエイビアン またその對手の若者にしても大して残忍な面構へではないのですからな。

マライア登場。

サア、トウビー 見ろ、鷓鴣の九番目の末子がやつて來た。（註。これもマライアの柄なことに言及したもの。鷓鴣は一菓九卵、その最後に解つたものが最も小さいと傳へられてゐた。）

マライア 皆さん、一番大笑をやつておかしさにお肚はらが痛くなりたいたら、隨ついていらつしやい。あのお莫迦さんのマルヴォリオが宗旨を變へましたよ、背教者になりましたよ。正しい信仰に依つて救はれようと思つてゐるキリスト教徒なら、あんな途方もない下品な真似は出来やしません。黄色の靴下を穿はいてゐるのですよ。

サア、トウビー 交差まじりあひの靴下止めをかけて、か。

マライア とても毒毒しく、ね。まるでお寺の中で學校をやつてゐる先生よろしくといふ格好だわ。私、從つけて行つたのよ、あいつをねらつてゐる刺客せつかくのやうに。私がたくらんだ落おとし文ぶんの中の註文を一つ残らず承つた通りにやつてゐますよ。インド増大の新地圖註。一五九九年、エメリ・モリノーが書いて出版した地圖。それまでに知らなかつた東インド地方の國が加へられ、羅針方位線が夥しく記載せられてゐた。」よりも、もつともつと線すぢだらけな顔をして笑つてゐますよ。あんな物はごらん

になつたことがないでせう。私や何かぶつけてやりたくてならなかつたわ。姫ひめさまきつとひつばたいておやりになりますよ。さうされると、あいつ、にやにや笑つて大した御寵愛を受けたと思ひますよ。

サア、トウビー さあ、連れて行け、そいつのゐる處へ連れて行け。〔退場。〕

第三場 街。

セバステイアンとアントニオ登場。

セバステイアン 私の勝手なら御面倒をかけたくありません。が、御苦勞をお喜び下さるので、これ以上やかましいことは申上げますまい。

アントニオ 後に残つてゐることが出来なかつたのです。研ぎ澄はました鋼鐵がねよりも鋭い私の願がせき立てたのです。それに、お逢あひしたいと思ふ一心いっしんばかり

りでもなかつたので、尤もそれだけでも、これどころか、まだまだ長い旅にも上ることになつたとは思ひますが、實は、この邊の事情に通じてゐられないあなたの旅路に何が起るかといふ懸念があつたのです。案内人もなく友人もない他國の方には、得て亂暴なことや不親切なことを致しますから。もとより、心があつてこそその親切ですが、それよりは寧ろ斯ういつた心配に説きつけられておあとを慕つたやうなわけです。

セバステイアン　どうも御親切なアントニオさん、御禮に御禮を重ね、更に御禮を申上げるより外に言葉もありません。世間には折角の親切に對し、かういふ一文にもならぬ返禮で始末をつけるものがよくあります。が、私の良心と同様に、私の値うちが堅固なものであれば、いづれもつとよい返禮を致します。どう致しませう？　この町の遺跡でも見て歩きませうか。

アントニオ　明日になさいまし。先づお宿を見つけるのが上策です。

セバステイアン　疲れてはゐないし、夜には大分間がある。お願ですから、この町に聞えた記念物だの名物だのを見て眼を樂しませることに致しませう。

アントニオ　それは御免を蒙りたく存じます。私は危険を犯さずにこの街を歩いてゐるわけではないのです。かつて伯爵の軍船を對手の海戦で、多少の手柄をあらはしたことがあります。かなり、人にも知られてゐることなので、ここで捕まつたが最後、助かりつこはないと思ひます。

セバステイアン　對手方の人を多勢殺されたのでせうな。

アントニオ　罪といふのはさういふ血腥いものではありません、尤も、時と争の性質より申せば、流血の慘事を惹起すことにもなりかねなかつたのですが。その後、私どもが分捕つたものを返しさへすれば仲直りは出来たかも知れないので、事實、私どもの町の者は交易の上からさういふことに致したのです。ところが、私だけはその仲間に入りませんでした。それで、萬一、この場處

で逮捕せられるやうなことになるかと、ずるぶん高い支拂ひをしなければなりません。

セバステイアン　ぢや、あまり大つびらにお歩きにならないことですね。

アントニオ　どうも、私には都合が悪いのです。お待ち下さい。これは私の財布です。南郊の「エレファント」〔註。「象屋」〕といふのが宿をとるには最もよろこびます。食事を命じて置きませう、あなたが町を見物せられて、時を過したり、智識を養つたりしてゐられる間に。そこでお目にかかります。

セバステイアン　どうして又、私があなたの財布を？

アントニオ　何かちよいとしたものがお目にとまつて買ひたいと思召すかも知れません。あなたの持つてゐられるのはつまらない買物などにお使ひになる爲のものではなからうと思ひます。

セバステイアン　財布をお預り致し、一時間程お暇致します。

アントニオ　「エレファント」へ。

セバステイアン　かしこまりました。

〔退場。〕

第四場　オリヴィアの庭園。

オリヴィアとマライア登場。

オリヴィア　あとを追はせた。來ると言つてゐる。どういふ風に御馳走をしよう？　何をさづけよう？　若い者の心を得るには、願つたり、誓つたりするよりは買つて自分のものにする場合の方が多いのだから。聲が高い。〔註。こゝまでは獨語。〕

マルヴォリオは何處にゐる？　あれは眞面目で、丁寧で、私のやうな身分の

者の僕にはうつてつけの男だ。マルヴォリオは何處だい？

マライア 今にまゐりますよ、マダム。でも、ずるぶん變つた様子をしてゐますよ。きつと物怪にとりつかれたのですよ、マダム。

オリヴィア まあ、どうしたの？ 暴れるのかい？

マライア いえ、ね、マダム、笑つてゐるばかりなのです。まゐりましたら誰か用心棒になる者を控えさせてお置きになつた方がようございます、きつと頭の方があやしいのですから。

オリヴィア ここへ呼んでお出せ。

〔マライア退場。〕

私だつて同じやうに氣が觸れてるのだ、眞面目な氣狂と浮かれた氣狂が同じものなら。

マライア、マルヴォリオと共に再び登場。

どうしたの、マルヴォリオ。

マルヴォリオ 姫さま、エッへ、へ。

オリヴィア 笑ふのかい。私や大切な用事で呼んだのだが。

マルヴォリオ 大切な、と仰有いますか。私も一大事を覺悟してまゐりました。

こいつは血の流を喰止める奴ですからね、この交差の靴下止めといふ奴は。

だが、それしきの事何かあらむ。一人の御方のお目を喜ばしめることが出来るなら、「一人よければ、皆がよい」と、あの至極尤な唄の文句が私のところなんで。

オリヴィア まあ、どうしたつての、この人は？ お前どうかしたのかい。

マルヴォリオ 脚は黄なりといへども思は黒からず。一件、彼の手に渡り、命は行はざるを得ない。水莖のあともし優しきローマ風の筆跡にはお互に覺があると思ひます。

オリヴィア お寢間へ行きますか、マルヴォリオ。

マルヴォリオ お寢間へ！ 行きますとも、情婦よ、あとかあまるぞよ。「註。

「寢間へ行け、情婦よ、あとかあまるぞよ。寢床、程よくやはらかに云々」の唄は當時流行したも

のと見え、一六一一年に出版せられた *Tarlton's Jests* に収載せられてゐる。リチャード・プロウムも

亦 *The English-Moor: or The Mock-Marriage* の中に同じ唄を引用してゐる。」

オリヴィア やれやれ、可哀想に！ どうしてそんなに笑ふの、またさう度度

指に接吻をするのさ？ 「註。自分の指に接吻するのは當時の氣取つた愛情表現であつた。「オ

ゼロ」第二幕第一場にも同じ風習に言及したところがある。」

マライア どうかなすつて、マルヴォリオ？

マルヴォリオ お前に返事をしろと言ふのか。なるほど小夜啼鳥さよなきどりが小鴉こからすに答へる。

マライア 何故あなたは姫さまのお目通りでこんな莫迦氣た失禮なことをする

のです？

マルヴォリオ 「高貴をな恐れ給ひそ。」うまく書いてあつたな。

オリヴィア そりや何のことを言つてるの、マルヴォリオ？

マルヴォリオ 「或人は高貴に生れ、」――

オリヴィア 何だつて！

マルヴォリオ 「或人は高貴を成就し」か――

オリヴィア 何を言つてるのさ？

マルヴォリオ 「又或者は強いて高貴なる者とせらる。」

オリヴィア もう駄目ね、お前さん！

マルヴォリオ 「君が黄色の靴下を賞め」か――

オリヴィア お前の黄色い靴下だつて！

マルヴォリオ 「交差まじりあの靴下止めを見むと願ひし者を思ひ起してよ。」

オリヴィア 「交差まじりあの靴下止めだつて！」

マルヴォリオ 「いで、いで、願ひ給ふならば君が身は定まれり。」

オリヴィア 「私の身が定まつたのかい。」

マルヴォリオ 「願ひ給はずばいつまでも僕の一人として君を見むかな。」

オリヴィア 「何の事はない、こりや眞夏の物狂ひだよ。〔註。「眞夏の物狂ひ」は一種の諺である。〕」

僕登場。

僕 マダム、オーシーノウ伯の若い紳士が立歸つて、居ります。なかなか歸つて頂くことが出来ませんでした。御都合を伺つて居ります。

オリヴィア 「私が行きます。」

僕 退場。

マライア、この人から目を離してはいけないよ。トウビー叔父さんは何處に

ゐます？ 誰か家の者にさう言つて特に世話を見てやるやうに。私や持參金の半分を失つてもこの人をひよんな目に逢はせたくないのだから。

〔オリヴィアとマライア退場。〕

マルヴォリオ ハ、ハー！ やつとお分りになりましたかな。私の世話はサア、トウビー以下の者ではいけないのだ！ こりや文の文言にちやんと合つてゐる。姫さまは己が横柄な顔をするやうに、わざわざあいつをお遣はしになるのだ。「賤しき服皮をうちすてて」と言つてゐられる。「身内の者と抗ひ給へ。僕婢には氣むづかしくし給へ。言葉にはおごそかなる談理を響かせ給へ。あやしく氣まぐれなる癖好みをよそほひ給へ。」で、結局どういふ風にやるかといふことを命じて、曰くさ。例へば、むづかしい顔、尊大ぶつた態度、ゆつくりとした言葉、然るべき紳士の容態といったやうなものだ。しめしめ、納候にかかつたぞ。が、こりやジョウウツの御業だ、ジョウウツがありがたい思

をさせて下さるのだ！ それに今、ここを出て行かれる時にさ、「この人の世話を^{よびか}見てやるやうに」だ。この人だ！ マルヴォリオにあらず、わが身相應の稱呼にもあらず、この人だ。や、何もかもひつたりと合つてゐる。で、寸分も、寸分の寸分も、疑念、障害、不信、不安を感じしめるやうな事情がない——どういふ異議があり得よう。己と己の希望が十二分に満されるといふことの間には何等の異議があり得ないのだ。さうだ、これは己のすることではなく、ジョウヴのなさることだ、お禮を申し上げなければならぬ。

サア、トウビー・ベルチ、及びフェイビアンと共にマライア登場。

サア、トウビー 一體全體、そやつは何處にゐるのだ。地獄中の悪魔が一かたま

りになり、魔軍註。原文には“Legion”とある。聖書マルコ傳第五章第九節に出てゐる悪魔の言葉に「わが名はレギオン、我ら多きが故なり」とあるのが出所。」がそいつに附いてゐたつて構ふものか、己が談判してやる。

フェイビアン ここにゐる、ここにゐる。どうなすつたのです、あなた。

サア、トウビー どうしたつてんだい、あつちへ行け。おい。

マルヴォリオ あつちへ行け。お前たちにはあいて對手にはならぬ。ひとりで静かにさせておいてくれ。行け。

マライア ね、あの男の中の悪魔がとつても弱弱い聲で何だか言つてるでせう！ 言はないことぢやないでせう？ サア、トウビー、姫ひめさまはあなたにお世話を頼みますつて。

マルヴォリオ ハ、ハー！ あれがさう申したかな。

サア、トウビー まあ、まあ。騒ぐな！ 騒ぐな！ そつと取扱はなければなら

ぬ。己に任して置け。どうしたい、マルヴォリオ？ 気分はどうだい？ え、
おい、悪魔なんざ何でえ。人類の敵ぢやねえか。

マルヴォリオ お前さんにはこの男の言ふことが分るかい。

マライア そら、ね、悪魔のことを言ふと怨むでせう。ほんたうに、魅せられ
てゐるのでなければいいんだが。

フェイビアン こいつの小水を巫女まごのところへ持つて行つておやりなさい。「註。

ジョン・ヘイウッドの『ホグズドンの巫女』The Wise Woman of Hogsdon などを見ても分るや

うに、當時の巫女と稱へる者はさまざまの怪しげな醫療や魔除けなどを職業にしてゐた。」

マライア さうだ、あすの朝、きつとさうしますわ。お姫ひめさまは私に言へない
ほどの高價なものに代へてもこの方かたを失ひたくないと思有るのよ。

マルヴォリオ 何、お姫ひめさま！

マライア まあ、どうしませう！

サア、トウビー おい、静かにしろ。さういふ風にやつちやいかん。お前はこい
つの氣を昂たかぶらせてゐるのが分らないのか。こいつは己に任せて置け。

フェイビアン そつとやるより仕方がありません。そつと、そつと。鬼おにつて奴は
亂暴です、そのくせ亂暴な取扱を嫌がるものでね。

サア、トウビー なあ、おい、どうした、好男子。どうだ、好い男。

マルヴォリオ 何ですつて！

サア、トウビー おいよ、これこれ、伴ついて來な註。これも古語の一節。「つてんだ。
君、何といふことだ！ セイタン註。悪魔の王。」と石ころがし註。子供の遊戯。」

をやるなんて威嚴にかかはるぢやないか。地獄の煤で汚れた抗夫註。これも

悪魔。地獄は地下にあり、絶えず火の燃えてゐる處と考へられてゐた。」なんざうつちやらか
して了解ひな。

マライア お祈をさせなさいよ、ねえ、サア、トウビー、お祈をさせなさいよ。

マルヴォリオ お祈をだつて、このあばずれめ!

マライア いけない、きつと神さまのことなんか聞き容れないのよ。

マルヴォリオ どいつもこいつも勝手にしろ! 莫迦な、淺薄な奴等だ。己はお前たちの同類ぢやないぞ。今に思ひ知らせてやるから。

〔退場。〕

サア、トウビー どうも驚いたものだな!

フェイビアン こんなことが現在舞臺の上で演ぜられたら、私や眞實味のない作りごとだと言つて罵倒してやりますよ。

サア、トウビー あいつの本氣になつてこちらの思はくにかぶれて来るのだからな。トライア 追かけていらつしやいよ、思はくが露れて臺なしになるといけないから。

フェイビアン こりや眞正銘の氣狂にしてしまはずせ。

マライア すると、家中が靜かになるわ。

サア、トウビー さあ、暗室に閉ぢ込めて、引縛つちまはう。姪はもう既にあいつが氣狂であることを信じてゐる。われわれには娛しみ、あいつには見せしめだ、このなぐさみが息を切らしてそろそろあいつが可哀想になるまで、これをこのままやつて退けてもいいのだ。さうなりや衆議裁判てなことになるつて、お前には判定人の榮冠を授けてやらう。だが、あれを見ろ、あれを。

サア、アンドルー・エイギユチーク登場。

フェイビアン 又一つ、春遊びの餘興が増えました。(註。五月の春遊びにはメイボウル・ダンスを中心に芝居、見世物、その他さまざまの餘興を行った。)

サア、アンドルー 果し状況だ。讀んでくれ。酢と胡椒でヒリヒリとしたところは保證するぞ。

フェイビアン そんなに嫌味〔註。藥味。〕がふつかけてあるのですか。

サア、アンドルー 言はずもがなだ。とにかく読んでくれ。

サア、トウビー 己に見せろ。〔讀む〕

「小僧、汝が何者であるにせよ、汝は唯、一人のけちな野郎なり。」

フェイビアン いいな、勇氣凜凜だ。

サア、トウビー

「いかなれば斯く言ふかと訝おかしむな、驚くな。われはその理由を示さざるべし。」

フェイビアン いい文句だ、それで法律にどやされずに済む。

サア、トウビー

「汝はレイディ・オリヴィアのもとに來り、姫はわがまのあたりにて汝を厚遇す。されど汝は大虚言吐おほうそつきなり。これはわが汝に果し合を求むる所以に

あらず。」

フェイビアン 簡單明瞭、極めて、筋の通——らないやつですな。

サア、トウビー

「われは汝の歸途を要すべし。若し、汝にしてわれを殺さんか、——」

フェイビアン いいぞ。

サア、トウビー

「汝はわれを悪黨、不頼漢として殺すなり。」

フェイビアン そこにも法律の風の當るところが避けてありますね、結構。

サア、トウビー

「さらばなり。神、われら二人の靈の一つに恵を給へ。〔註。その靈は肉體を離

れた、即ち殺されたものであるから、との意。〕 神はわが靈に恵を給ふやも知れず、

されどわが望は更にまされり。〔註。自分は殺す方に廻りたい、靈となつて神の恵を受

けたくないとの意。」それ故に汝は用心せよ。汝の出方に依つては汝の味方に
して宣誓せる仇敵

アンドルー・エイギネチーク。」

この手紙で動かなけりや脚が動かないのだ。己が渡してやらう。

マライア それにはちやうどよい機会がありますよ。あの人は今姫さまと談合
中で、その中にお歸りになります。

サア、トウビー 行け、サア、アンドルー。査公の手先見たいに、庭園の隅のと
ころで偵察しろ。奴を見つけるが早いかな、抜くのだ。抜く時には毒付くのだ。
啖呵を切つてキビキビと言つて退けた毒舌が實行で示したものよりも以上に
男振りを上げたといふやうな例はよくある事だから。

サア、アンドルー いや、その毒舌なら合點だ。

〔退場。〕

サア、トウビー さて、己はあいつの手紙を渡さないつもりだ。あの若い男の舉

動を見ると、ずるぶん才能もあり、教養もある男だ。あいつの主人と姪との
間に使をしてゐるといふことなどもその證據だ。それで、この手紙などはま
ことに以て無智無學なものだから、あの若者をびくともさせるものぢやない。
きつと何處かの大莫迦者から來たのだと思ふだらう。だがね、己は口頭であ
いつの果し状を渡してやる。エイギネチークを素破らしく武勇の名に聞えた
者にしてやる。で、若い年頃には得てさういふ風に考へたがるものだから、
あの仁があいつの猛猛しさと、熟練と、激情をとつても恐しいものと思ふや
うにするのだ。かうなると、双方恐ぢすくんで、顔を見合つたが最後、まる
でコツカトリスのやうに、互に睨み殺されて了ふ。〔註。コツカトリスはバジリスク
とも稱へる。物語の中の蛇で、その一脱は命を奪ふ力をもつてゐると傳へられた。〕
フエイビアン そこへ姪御と一緒にやつて來ました。暇乞の濟むまで隠れてゐま
せう、その上で追つかけませう。

サア、トウビー その間己は何か果し状になるやうな恐しい傳言を考へて置かう。

〔サア、トウビー・フェイビアン、マライアと共に退場。〕

オリヴィア、ヴァイオラと共に登場。

オリヴィア 石のやうな御心に向つてもう言ひ過ぎる程申上げ、たしなみもなく思のたけを述べて了ひました。何となく身の咎を責めるものがあるやうに思ひますが、それも、ただもうひたむきになつた、力の強い、咎で責められることなんか何とも思つてゐないのですよ。

ヴァイオラ あなたが戀しいあまりになさるのと同じ仕草を主人の悲しみがやつてゐます。

オリヴィア これ。この寶石〔註。寶石の入つたロケットの類。〕を附けて下さい。私

の姿繪が入つてゐます。いやだと言つてはいけません。繪はあなたを苦しめるやうなことは言はないのですから。それから、お願です、明日またいらして下さい。どんなものをお求めになつても私がさし上げないといふやうなことがありませうか、求められてさし上げることに名譽が汚されないものならヴァイオラ ただこれだけでございます。主人へのまことの戀を、と。

オリヴィア あなたにさし上げたものを御主人にさし上げて名譽を保つことが出来ませうか。

ヴァイオラ 私の方は御心配に及びません。

オリヴィア ちや、明日又いらして下さい。さやうなら。そなたのやうな鬼なら、私の靈魂を地獄へ運んでくれてもいいのよ。〔註。最後の一句は獨語。この頃まで行はれた「間の狂言」'Interludes'の中には鬼が人間の靈魂を背負つて地獄へ驅け込むところで終つてゐるものが多い。恐らく、それを想ひ出してこの獨語を言つたものと思はれる。〕

〔退場。〕

サア、トウビー・ベルチとフェイビアン、再び登場。

サア、トウビー 君、御機嫌よう。

ヴァイオラ 御同様に。

サア、トウビー 早速護身の用意をせられるがよろしい。あなたがどういふ不法を仕向けられたのか、その邊のことは存じません。が、あなたを待ち伏せしてゐる男は、怨恨に満ちた、探偵の獵犬見たいに殺伐な奴で、庭の隅に待ちかまへてゐます。劍をおはづしなさい。ぬかつてはなりませんぞ。かかつて来る奴は敏捷くて、巧者で、とつても強いのですから。

ヴァイオラ 人違ひでせう。私は人に喧嘩を吹かけられるやうな者ではないのです。私の記憶は澄み切つたもので、人に逆らつた行の影などを見ることは出来ません。「註。これは記憶を鏡のやうなものに譬へた、詩的落想である。「全くどんな人にも

逆らつたといふやうな覺がありません。」と言へば今日の表現法になるであらう。」

サア、トウビー ところが、さうでないといふことがお分りになる、これは請合ひます。で、少しでも命が惜しいと思はれるなら、油断はなりませんぞ。何しろ對手といふのが、若くはあり、力は強し、腕は立つ、それに、怒り狂つてゐるといふのですからな。

ヴァイオラ もし、それはどうした方ですか。

サア、トウビー 士爵ですよ、双こぼれのない細身の劍で肩を敲かれた。「註。拔身の劍で肩を敲くのは士爵叙勳の儀式である。」つまりお座敷役を買はれた奴。「註。原語は

“on carpet consideration”である。戦功に依るのでなく、廷臣としての功勞を認められたとの意。」

ですがね、私闘となると、悪魔です。既に三人の靈と肉とを縁切りにさせました。刻下の憤激は到底押鎮めることの出来ないもので、對手を殺して棺の中にぶち込まなければ収まらないことになつてゐます。乗るか逸るかといふの

が奴の言なのです。つまり命のやりとりをしようといふのです。

ヴァイオラ もう一度お館へ立ち歸つてどなたかお姫さまの護衛をつけていた
 だきませう。私は闘士ではありませんから。わざわざ喧嘩を持ちかけて對手
 の度胸を試す男があると聞いてゐますが、これは多分さういつたやうな氣ま
 ぐれた人でせう。

サア、トゥビー いや、それはなりませんぞ。あの男の怒は極めて筋の通つた怨
 恨の念から出てゐるのだ！ だから、出かけて行つて望み通りにしておやり
 になるがよい。館へ立ち歸つては相ならぬ。尤も、私を敵に廻してもやつて
 見ると仰有るなら別だが、そいつは挑戦に應ずるよりも安全だとは言へます
 まい。だから、進むのです、抜かば玉散る刃を鞘から拂ふのです。闘り合ひ
 はまぬがれませんよ、それだけは確實です、でななけりや鋼鐵〔註。劍。〕を
 帯びることなんざ止めるがよいのだ。

ヴァイオラ これは奇體な、又無法なことを仰有るものです。お願ですから、
 その士爵に私がどんな罪を犯したかといふことを尋いて下さいませんか。き
 つと、わけがあつてした事ではなく、何か、つい氣がつかないでした事だら
 うと思ひますから。

サア、トゥビー さう致しませう。シニョール・フェイビアン、私の歸るまでこ
 の方と一緒に待つてゐてくれ給へ。

〔退場。〕

ヴァイオラ もしあなた、あなたはこの事件を御存知なのですか。

フェイビアン 士爵があなたに怒を含み、死を賭して争ふと言つてゐることは承
 知してゐますが、それ以上の事情は、存じません。

ヴァイオラ どんな人ですか、その方は。

フェイビアン 見たところ、姿なんかは大したものではありませんが、さて試合
 となると、どうして剛の者です。實際イリリアのどういふ處にも二人とない、

腕の立つ、惨忍な、とつても恐しい敵手ですよ。ぼつぼつお出かけになりませんか。私の力に及ぶ限り、和解の出来るやうにしてさし上げませう。

ヴァイオラ さうしていただければありがたく思ひます。私なんかお士のおつきあひをするよりもお僧さんのおつきあひをした方が性に合つてゐるのです。

〔旁白〕これ位の本性なら誰に知られたつて構やしない。

〔退場。〕

サア、トウビー・ベルチ、サア、アンドルーと共に再び登場。

サア、トウビー おい、君、あいつは悪魔の化身だぜ。あんな邪慳な奴を見たことがない。己も一試合やつては見たがね、細身の剣でさ、鞘ぐるみでやつたのさ、ところがとつても猛烈な突きの一手を食つてね、そりやもう避けられたものぢやないんだ。ヤツと突き返すと、そいつがガツチリと跳ねかへす、

その手堅いこと、脚下の地面を蹴るに似たり、さ。何でもソフィー〔註。前出。ベルシヤ王の總稱。〕の剣士だつたといふことだよ。

サア、アンドルー 弱つたな、關り合ひになりたくないな。

サア、トウビー さうさ、だが、今となつてはとり鎮めようがないんだ。フェイ

ピアンがむかふで何と言つたつて聴かないんだ。

サア、アンドルー 困るな。剛い奴で、そんなに劍術がうまいといふことが分つ

てゐたら、果し状を出す前に、ままよ、勝手にしろ、と言ふところだつた。こ

の事件は穩便にするやうに言つてくれないか。己の馬を、あの灰色のカピ

レット〔註。北英の方言カブール (cabul) は馬のことであるから、カピレットはその指小辭であ

らうと、ライト (Wright) は考へてゐる。〕を呉れてやるから。

サア、トウビー 言つて見よう。ここで待つて居れ。いいか、見せかけは立派に

してゐるのだぞ。こんなことで人の靈を滅してもなるまい。〔旁白〕さあ、

この己さまが貴様を乗り廻はすやうに貴様の馬を乗り廻はしてやるのだ。

フェイビアンとヴァイオラ登場。

〔フェイビアンに〕 喧嘩仲裁料に馬を貰つた。その若い者が悪魔のやうな奴だと
思ひ込むやうにしてやつた。

フェイビアン こちらも恐しく對手を氣に病んでゐますよ。まるで熊にでも追ひ
つめられたやうに、吐息をついて青くなつてゐます。

サア、トウビー〔ヴァイオラに〕 どうも策の施しようがありませんよ。誓つた以
上どうしても闘ふと言ふのです。尤も、改めて怨のかどを考へて見ると、今
のところ、その方は言ふに足るほどのことではないと思つてゐます。だから、
やつの誓を通す爲に抜いておやりなさい。危害は加へないと言つてゐます。

ヴァイオラ〔旁白〕 南無三、大變なことになつた！ 何かちよつとしたことが

あれば男にはとてもなり切れないことが分るのだけれど。

フェイビアン 唖り立つて來たら遁げるがよろしい。

サア、トウビー 來給へ、サア、アンドルー、どうも仕方がない。この方は體面
上、一勝負すると仰有るのだ。決闘の法則上、避けることは出來ないのだ。
が、士人として又武人として、決して害を加へないと約束せられた。さあ、
來給へ、やつつけるのだ。

サア、アンドルー その約束通りにしてくれればいいのだがなあ！

ヴァイオラ 本當に、私の本意ではないのですけれど。

アントニオ登場。